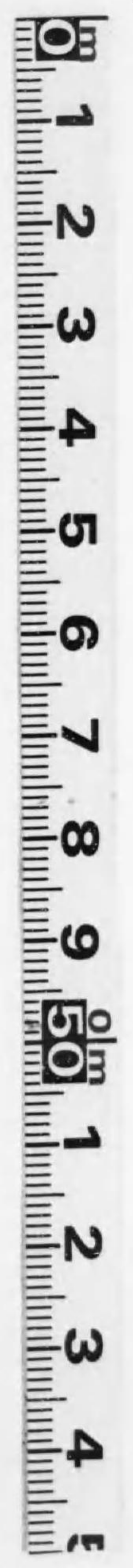


529
49



始





創作

鏡

音

大正
13. 7 26
内交

329-49

観音文字曼荼羅

—著者の言葉—

創作「観音」は、近衛隆子の名に依る一人の女性の思想、信仰、生活様式を、その中心として、無量無邊の観音の愛を描いたものであつて、人間が念願する處の、愛慾淨化——の戦ひに勝つた、強い信仰の道程を描ける、一種の文字曼荼羅である。

この創作「観音」には、全篇に漲る濃艶な官能描寫があるが、それは観音の信仰の極致たる、應作、悲體——といふことが、本當に理解し得られたならば、私が描いた官能描寫は壯嚴なる光輝を放つてあらう。

私はこの春、創作『大凡蓮如』を發表した。宗教長篇創作としては、初めての試みてあつたが、讀賣新聞では『佛家はよく罪業消滅を説くが所謂罪業なるものは何人の場合に於ても女に原因するものが多い。蓮如上人自らにした處が又其周邊の人物にしても邪淫戒を破つた苦惱の辛酸味は甜めつくして居る故にこの創作が愛慾の根強い異臭に満ち同時にその破綻の悲劇と人間苦の脱却とにあやしきまでの魅惑を含んで居る事は異とするに足らぬ』と言つてゐたが、この『觀音』を見たら、より以上に宗教的作品として官能描寫を否定するかも知れない。

けれど『大凡蓮如』にしる、この『觀音』にしる、愛慾生活のみを描いたのでなく、もつと人生の諸問題に深刻に觸れて居る筈である。宗教的作品としての哲學的價值、宗教的價值といふ點から作者の態度を純眞に見て貰ひ度

さと思ふ。

私はこの創作『觀音』を脱稿せんとする時に、九條武子夫人から「目下つづけて『觀音』御創作のよし何より結構と存じ候。現在我國文藝の上にも宗教的創作の立派なものが是非出てよき頃でなきかと、しみじみ思考かつ願はれ候折から折角御努力たのもしく存じ申し居り候」との書面に接した。

九條武子夫人は、信仰の人として、現代の女性の中で、誰でもが最も讃仰し得られる女性であると思ふ。眞面目な考へをもつて居る人々に我文壇に偉大なる宗教的創作の出づるを期待せられて居るのを思ふと、宗教作家としてのスタートを切つた私は、己を願て微笑を禁じ得ない。



長篇
創作
觀

音
芳
川
越

觀音を信仰する人は自分自身がすでに觀音に近づいて居るのである。觀音を深く信ずることに依つて、何時しか、觀音そのものの化身となつてしまふのである。

私は次に長篇創作『般若波羅蜜多』を書く。悟りの彼岸に行きたいとの念願を有する人々に與ふる聖書であることを自信する。

表紙の『聖觀音』は入竺再度に及ぶ我國に於ける佛畫家としての第一人者桐谷洗鱗氏の筆になつたもの、觀音の字も亦氏の筆で、私の創作のために、特に揮毫せられたのである。

第一節

眞觀清淨觀
常願常瞻仰
能伏災風火
慈意妙大雲
淨證經官處
衆怨悉退散

廣大智慧觀
無垢清淨光
普明照世間
澍甘露法雨
怖畏軍陣中

悲觀及慈觀
慧日破諸闇
悲體戒雷震
滅除煩惱礙
念彼觀音力

綾の法衣を纏ふて、普譚の聲と共に、隆子が薦たけたその姿を現はした時に、今まで口口に、観音經を唱へて居た多くの善男善女は、隆子が唱へはじめた明らかなその聲につれて、はげしく珠数を爪繰りながら、今までより以上に、聲を高めて、観音經を唱るへのであつた。

隆子は、こんなに澤山の人達が、自分の説教を聴きたいばかりに、恚うして集つて居るのを見ると、あまりに社會から買被られて居るやうな氣がして、思はず慄ひせずには居れなかつた。

彼女は靜かに稱名を唱へて居たが、高座に上ることが、何となく躊躇せられた。自分は果してこれ等の人達に、心の糧を與へることが出来るであらうかといふ自己懷疑が、先づ彼女の心を覆つてしまつた。

燈明の光りが薄暗い天井からさげられた天蓋の金具に、反射して、その光りが、懺悔を強制するやうに、心を苛むやうに、強い力をもつて、自分の靈性に蝕ひ入つて來るやうな壓迫をさへ感じさせた。

今日は多くの人達の前で説教しなければならぬといふので、その材料に就いて、いろ／＼考へて夜を更かしたので、睡眠不足から眩まひがするやうな氣がした。

彼女は高座にすはる前に、自分といふものを考へさせられた。自分は、人々の前に立つて、説教などする資格があるだらうか、自分には、自己を穢塊——そのものの象徴である

との自己否定はない。自分の行為に對する主觀的な自己肯定は、他人に共鳴せられる處でないかも知れぬが、自分はそれに對しては詭辯でなくある力強い信念を抱いて居る、けれども、嚴密に、自分を俎上にのせて精神的に解剖した時に、自分はどれほど醜い要素に依つて作られた人間であるかと思ふと、とても、人々の前で精神教化といふ目的のために、自分の考へて居ることを話すといふ事は、あまりに厚顔しい事のやうに思はれた。

それでも、隆子は仕うしても、説教しなければならなかつた。自分が高座に現はれるといふ事のために、多くの人々が、萬障を繰り合はせて、参集するのであると訊くと、何か話さなければならぬので、彼女は、自分が近頃感激して居る「愛の女神としての觀音と光明皇后」といふ題に就いて、説教しようと決心したのでつた。

隆子は、説教の草稿を手にして、高座に出ることにした。どうせ、説教するといふことになれば、まだ説教に馴れない自分のことであるから、きつと、へまをするに違ひないと思ふと、草稿をこさへて説教した方が、どんなに、心強いかわれないと、思つたからであつた。

隆子は高座にすはつて、一座を見廻はした。自分のすぐ前に、年寄の婆さんが座つて居て、自分の顔をじつと見つめて居る、その左の頬に、かなり大きいほくろがあるといふことを發見して、彼女は、自分が思つたよりも落付いた態度で、話をすることが出来さうに思はれて、思はず微笑した。

と、同じ瞬間に、一人が稱名を唱へると、他の者までが、唱へはじめた、それが客觀的に物を考へようといふ落付いた心持のときに、突然に起つた聲であつたから、隆子は反つて面喰つてしまつた。

「何といふ奇麗なお方さまでせう」

「おしとやかで、お上品で」

こんな聲が、横の方から聞えて來た。隆子が微笑した、その朱唇からは、金鈴のやうな聲が流れ出でた。

觀世音菩薩の願望は無量の慈悲であります。觀世音菩薩を専念すれば、法身に、人身に獸身に、その姿を現はして、惱める衆生に、無畏を施して下さいます。

光明皇后は、この觀音愛の具持者でありまして、觀世音菩薩の願望の最高限度の實現者でありました。

欽明天皇の十三年十月、百濟の國王から、釋迦牟尼の金銅像、經論若干卷、その他が、我國の朝廷に獻ぜられてから、上宮太子攝政に至るまで、僅か四十年の間に、人々は新しく傳へられた法の道に歸依し、奈良朝に入つてからは、聖武天皇、光明皇后の歸依信仰に勵まされて、その極點に及びました。

殊に、光明皇后の淨愛無邊的な、觀音愛の體驗は、歸依願望の人心に、理想的な典型でありまして、程なく、三論、法相、華嚴、俱舍、成實、律、天台、眞言——の八宗は弘通して清淨なる法の園に、絢爛の美を競つたのであります。

光明皇后は、藤原不比等を父とし、女傑橋三千代を母として、この世に生を享けられました。けれど皇后は、權門に生れたことの幸福を感謝する心持と、人間として凡てを體驗

することの出来ない不自由の惱みとの岐點に立つて居られました。

彼の橋三千代は、その前姓を縣犬養連三千代と申しまして、初め三野王の女房となり、橋諸兄を産みました。その後、持統元明の兩帝の文武帝養育の時に選ばれて、内命婦として仕へ、大功によつて、橋姓を賜り、宮仕へを辭してから、間もなく、藤原不比等の後妻となつたのであります。

文武帝の乳母でありました三千代は、天皇即位の後、三夫人を選ばれるとき、不比等の先妻の娘宮子姫を入内させました。まもなく宮子姫は聖武天皇を産み奉り、即位せられると、三千代は不比等との間に産れた安宿姫を夫人として入内せしめました。

そのために、宮中に於ける三千代の勢力は、旭が天に昇るやうで、三千代の向ふ處には、必ず權勢がつきまstoffたのであります。

安宿姫はやがて懷妊して、皇子は生誕せられました。天皇の御喜悅は例ふるにもなく、さまざまの祝典は擧げられ、大赦が行はれました。

皇子は御誕生後三ヶ月目に、皇太子に立たれましたが、やがて病に臥し給ふたので、朝

廷では、観音像、經文を作つて、禮佛讀經して、その御平癒を祈りましたが、痛ましくも、皇太子は滿一ヶ年を経られずして、藤原氏の邸でみまかられたので、天皇は愁嘆せられ、三日の癡朝を仰せ出された程でありました。

神龜六年六月、天平と改元せられ、安宿姫は立后せられました。民間より出でて、皇后になられたのは、安宿姫が嚆矢で、立后斷行といふ異例に對して、種々の非難もありましたが、天皇は

「難波の高津宮の御宇、大鶴オウサマ天皇は葛城會都比古カキノの女、伊波萬比賣命イハノ皇后と御相座して政を治め給ふたことがある」と仰せられたほどでありました。

その裏面には、橘三千代の横暴が、糸を繰つて居たのでありますが、その越權も、光明皇后の淨慈の生活に依つて贖はれたのであります。光明皇后を産み奉つたといふ三千代の榮譽は、その不道を償ふに充分でありました。皇后は衆生教化の普遍的な行爲を實行せられたほど、観音愛の具持であつたからであります。

光明皇后は、天平第一の美貌の所有者でありまして、剩さへ清淨圓な與佛性を具持せら

れて居りました。殊に、肉親の暴虐や、愛兒の死といふことは、人生無常といふことを、皇后に教へたのであります。

皇后の魂の自覺は、聖なるものへ、不滅なるものへと積極的に歩いて行きました。自分の胸の底に秘む苦惱を、じつと押へて自分の姿を凝視する時に、皇后は佛光に融合せられて、世にも有難き、無量無邊の願望は、涙ぐましいまでに皇后の靈性の中に宿つたのであります。

生ける者の靈魂を考へ、無限の慈悲によつて、衆生を濟度しようといふ観音愛が、皇后の靈の中に芽生えして來た時に、惠まれたる自分の生を、皇后は感謝せずには居られませんでした。

皇后は、ある日、「施浴」をすゝむる聲を、閑裏かんり空中くうちゆうに聞かれましたので、皇后は感激の中にひたつて、すぐに浴室を建てられました。

貴き者、賤しき者の別を立てず、何人にも自由に、浴を與へるといふ御布令は發せられました。そればかりでなく、皇后は

「親しく、千人の垢を流してやらう」といふ大慈悲願を建てられたのであります。それを聞き傳へて、浴室には、群衆が押し寄せて來ました。

「萬乗の皇后の宮が、垢を流して下さるさうである。人間に生れて、その大慈悲願に逢ふことの出来る私達は、何といふ幸福者であらう」と、何れも、皇后の徳を稱へて、施浴場の周圍には、春のやうな歡喜が漂ふて居りました。

大臣達は、皇后の發願を知つて、愕いて諫止申上げましたけれども、強い信念の下に建てられたその發願を思ひ止まらせることは、誰の力でも出来ませんでした。

九百九十九人の汚垢は流されました。最後に残つた一人の男を見られると、肌は紫色に爛れて、今にも崩れ落ちさうになり、嗅氣は鼻を刺戟して、顔をそむけずには居られない癩病患者でありました。

「如何に大願とは云へ、金科玉條の皇后の宮が、穢塊膿袋そのものの垢を流されることは畏れ多いことである」と、近侍の者は、その癩病患者を追ひ立てようとしたが、大願を建てられた皇后は、佛の御名によつて誓つたことを破ることは出来ないで、近侍の者

をたしなめて、浴室に這入り、親しく、患者の垢を流してやられました。

癩病患者は、快い微笑を泛べながら

「皇后様、私は御覽の通り、惡病を患うて、久しい間、惱まされて居ります。醫者が申しますには、この肉體からあふれ出づる膿汁を誰か人間に吸はせたならば、平癒するのとどこでございますが、そんな慈悲深いお方は、この世の中には一人もありません。そのため、私の惡病は、日に／＼募つて行くばかりであります。けれど、御佛の大慈悲から見ますと、汚いとか臭いとかいふ、さうした區別はない筈でございます。私は、皇后様が世にも尊い御佛の教を信仰せられて、夜と晝とを分たず、何千人といふ工匠が、經を誦する中に立つて働き、清淨精進の中に、東大寺を建立せられて、毘盧遮那佛びろくしなぼつを供養せられたといふことを承つて居ります。御慈悲深い皇后の宮様、一生の御願でございます。どうぞ、私の肉體から流れ出づる膿汁を吸ひ取つて下さい」と頼みました。

皇后は、癩病患者のこの要求に愕然として二、三步、後に退られました。大願を建てたと云ひながらも、萬乗の大君に奉仕する身、當代稀に見る美貌の持主—といふことを意識

せられた時に、すぐに快諾の返事を與へられることは出来ませんでした。

美の癡滅である——といふ官能の躊躇が、その胸底に躍動しました。迷路に立たれた皇后は、瞑目して、何かの示現を待たうとせられたが、その瞬間に、躊躇した自分の心を蔑しむ懺悔が、涌然として起つて來たのでありません。

皇后は微笑を浮かべながら、癩病患者に近づいて、その肌に、燃ゆるやうな朱唇を觸れさせて、穢土からじみ／＼と湧き出でて來る膿汁を吸はうとせられました。

紫黑色を帯びた肌から、黄色い膿汁が絶えず湧いて來ます。膿汁は鼻覺を強く刺戟してむせかへるやうな嫌惡を感じさせるほどでありましたが、自己懺悔の渦巻の中に在る皇后は汚感から超越して、甘露を吸ふやうな快い微笑の中に、口一杯に膿汁を吸ひ溜めては、其處にばつと吐き出して、又、何の慮する處もなく、その朱唇を、癩病患者の肌にもつて行かれたのでありません。

幾度となく繰り返へされて、頭から踵までの膿汁は一通り吸ひ盡された時に、患者は、皇后の宮を禮拜して

「至尊の身をもつて、忌はしい癩病患者の膿汁を、よく吸ひ取つて下さいました。これといふのも、偏に、遍照無邊の佛光によるものでございます」と云つて、暖い御身に取り纏つて、感激の涙をこぼしました。

皇后の心は日一日と歸佛禮讚に緊張して行きましたが、ともすれば、自分の心が、人間意欲に引戻されようとするのを怖られました。勉めて精進して行かなければ退歩するやうな恐怖に悩まされるので、その悶えから脱れるために一伽藍を建立して、阿闍寺と名づけられました。

皇后は、ある日、講堂で、一體の地藏尊像を見られました。その尊像は、名工の手に成つて、精巧な上に、名工の人格が表現されて居ると見えて、皇后の靈魂を魅惑してしまひましたが、人間意欲に捉はれようとする皇后は、その尊像のやうな、美しい生身の沙門に憧憬をもつやうになられました。

皇后は自分の魂の動搖を、恐しいものと思つて、その誘惑から脱れやうと焦せると焦るほど、人間意欲が擡頭して來るのでした。

近侍は皇后の仰せを畏んで、諸所を探しましたが、やうやくのことで、實忠といふ地藏尊像にも優る端麗な沙門を探して來ました。自分の前にひれ伏した沙門の姿を見て、皇后は、ある魅惑を感じられて、思はず顔を赧められました。と、何かの意識が仄めいたかと思ふと、皇后は満足さうな微笑を洩されました。

實忠は、皇后の宮より浴を賜つて、浴室へ案内せられました。皇后は、その時より早く、浴室の隣室に行つて、實忠の美しき肉體を貪り見ようと待つて居られました。

雪のやうに白い肌、ふくよかな肉體を、春のやうな惱ましい心で、その肌から一刻も腫を放たずに凝視して居られた皇后は、恍惚として、飽く處なきまでの深味にまで、自分の心が辿つて、夢の國に遊んで居るやうな欣びを、感じて居られました。

ふと、ある物音におびやかされて、皇后は恍惚の境から現實の自己に眼覺めると、その瞬間に、皇后の靈性は統整せられました。

皇后は、人間意欲に狂つて居る淺ましい自分の姿を、客觀的に見ることが出來ました。今まで、醜惡な心に占有せられて居た自分の姿を見て、懺悔の涙が、はらくとこぼれて

來るのでした。

「私は愚かな者でございます。私は愛慾に迷はされて居りました」と、皇后は懺悔せられたのであります。

光明皇后は、觀音を信じ、その信仰を體驗せられた觀音の化身でありました。無量無邊の觀音愛の徹底的な表現者でありました。

女性は美であります。そして醜であります。肉體の美と共に、精神美の所有者であることに、莊嚴なる美の輝きがあります。従つて、その美は肉感的なものであつてはなりません。純情の美、聖淨の美でなければなりません。

その美の持主たる光明皇后が、女性の理想的人物であることを、女性は肯定し得るだけの自己淨化の境涯にあらねばなりません。

□

説教を終つて、休憩室に歸つて來ると、隆子は今日の話が、妙に氣になつて仕方がなか

つた。

観音愛と光明皇后といふことに對して、自分の解釋して居ることは正當だらうか？ その眞實を冒瀆するものではなからうか？ といふ不安が、なか／＼離れなかつた。

「非常に有難いお説教でした。皆の人達は満足して歸りました」

「話のわからぬ人達は、お姿を拜んだだけでも往生が出来ると喜んで居ました」

周囲の者は、隆子の機嫌を氣にして、追従するやうに慙う云つたが、そんな迎向的な言葉は、隆子には少しも嬉しくなかつた。

彼女にとつては自分の説教に對する批評、そんなことはどうでもよかつた。第三者がどんな批評を降さうと、自分自身に背定し得られることでなければ、彼女は満足することは出来ないのだつた。

隆子は周囲のものに顔を見られたり、話をしかけられたりすることが、何だか厭はしくなつて來た。

自分一人になつて、じつと思案して見たいと思ふと、もう一刻も、窮屈な一座に居るこ

とが堪へられなくなつて、俤を呼ばせて、自分の邸に歸つた。

第二節

隆子は自分の思案の部屋を「桃色の部屋」と呼んで、何人をも、その部屋に出入することを許さなかつた。

彼女は夫陽一と別居してから十年の間、社交界にもあまり顔を出さなかつた。時々、説教に出る位であつたが、それも一年に二度か三度だつた。それ以外は彼女は毎日のやうに、その「桃色の部屋」に籠つて居た。

女中や小間使なども、隆子が桃色の部屋にのみ閉ぢこもつて、一體何をして居るのか想像することさへ出来ない程だつた。

従つて、孤獨の生活をして居ても、周囲から、人格的な非難を蒙ることはなかつた。そんな非難をするやうなこともしなかつたので、社會は彼女が清淨な生活をして居ることに好意をもつ者もあつたが、何かにつけて、非難したがる一部の者は、「性的に缺陷のある

女」とまで云つて居ることも耳にして居たが、それを時々思ひ出しては、苦笑せずには居られなかつた。

「桃色の部屋」は、隆子にとつては、唯一の慰めであつた。彼女にとつては、観音愛の象徴たる部屋であつた。

部屋は洋館で八疊と六疊ほどの大きさの二室であつた。八疊の室は、彼女の冥想する部屋で、周囲の壁色は、煤んだ色で塗つて、なるべく光線が射し込まないやうに、窓も三方に開けられてあつたが、何れも胸のあたりまである高さの處に小さい窓をこさへて、桃色のカーテンが暗い全體の色彩に對照して、沈んだ氣分を、いくらか明るく引立たせるやうになつて居た。

其處には、經書をぎつしりとならべた、本箱が周圍に並らべてあつて、香爐や時代のついた佛像や、支那皿などが、配置よく置かれてあつた。青磁の水差などは、支那の古代のもので、薄暗い中に、いくらか黄色を帯びた青味が、非常に感じよい色彩だつた。この青磁だけは、彼女が最も愛翫して居たものであつた。

六疊の室は、この部屋とは反對に、官能を刺戟するやうな明るい感じを與へるやうに裝飾せられてあつた。

カーテンは淡絹の桃色で、周囲の壁も桃色で塗り、明るい光線が射し込んで來たが、その明るさも、桃色のカーテンを透して射込む光りで、それが桃色の壁に反射する位であつたから、柔かい感じを與へるやうになつて居た。

壁には錦繪の額が二枚、それも繊細な線描で、美しい女の曲線美を、徹底的に描いた歌麻呂の作で、その額などは、古代の印度更紗で表装してあつた。

窓の下には根來塗の赤い机が置いてあつて、その上には、小さい一體の黄金像が飾られてあつた。

部屋の片隅には、赤い緞子の布團が敷かれてあつて、枕屏風が建てまはされて居たが、その枕屏風は、木版摺りの古本をこわした珍らしい「萬歳」の文句で貼りませた澁いものであつた。

隆子はこの二つの部屋に限りなき愛着をもつて居た。彼女は思索しようとするときに

は、何時も八疊の部屋に入つて、瞑想の時を費し、それに倦んだり、又は人間意欲が擡頭して來ると、堪えられぬ孤獨の淋しさを慰めるために、六疊の部屋に入つて、赤い緞子の布團にくるまつて、飽く處なきまでに、空想の時を過すのが、何よりも楽しみであつた。

雪のやうに眞白い彼女の肌は、三十歳前後の成熟した豊さに、はちきれぬやうな柔さと、今にも燃え上らうとするやうな熱をもつて居て、桃色のカーデンを透して射し込む柔かい光りに照された自分の軀を見つめて居ると、隆子はすべての官能的な懊惱より解放せられるほど變態的な處もあつた。

説教して歸つて來た隆子は、その桃色の部屋の八疊の室に入つて、窓下の低い椅子に腰かけて、何時までも眼をつぶつて居た。

彼女は、今日、説教した、光明皇后と愛慾淨化の生活を考へて居たのだつた。あのやうな場合に、自分は果して、人間意欲から超越することが出来るであらうかといふ疑問から、何時までも解放されなかつた。

「私はこの部屋に在つて、思索して、この問題の解決をすることが出来なければ、六疊の

部屋に行かなければならない。六疊の部屋に行つたならば、或は速かに、この懷疑は解決せられるかも知れない。けれど、私はこの八疊の部屋に在つて、解放したいと思つて居る。二日でも三日でもこの儘の思索をつぶけても好い。この部屋で解決されるならば私の誇りである。けれど解決の道を發見し得ることなく、六疊の部屋に入つて、解決の緒を得たとすれば、それを墮落であるとして、自分を蔑しみたいと思はない。が、出来ることなら、八疊の部屋で……」

隆子は恚う思ふと、清澄になつて行くべき自分の思索が、取りとめのつかないやうな破綻の淵に落ちて行くのを意識して、何時しかその眼には涙が宿つて居た。

「愛慾淨化といふことは、自分の本當の靈性に内省して見て、肯定せられなければならないものである。其處に、詭辯の挟み入れらるべき餘地があつてはならないものである」

隆子は恚う考へて居た。まだ訓練せられない、解脱せられない、自分の心を意識して居るだけに、なるべくならば、八疊の部屋で、解決したいと焦慮するのであつたが、深刻に考へて行けばそれだけ混亂して行く自分の靈が判つきり見えて來るのであつた。

夕日の光りが窓から射し込んで桃色のカーテンは燃ゆるやうに彩られて居た。
懊惱した彼女は、ふら／＼と立上つたかと思うと、次の六疊の部屋の真中に立つて居る自分の姿を見た。

部屋の中に配置せられて居る凡てのものは、彼女の惱める魂を抱擁するやうに、待ちこがれて居るかのやうに思はれた。

その瞳が、朱の緞子の布團に注がれると、彼女は、睡眠を催すやうな、淡い誘惑を感じて、くる／＼と帯を解き、着物を脱いだかと思ふと、燃ゆるやうな緋縮緬の長襦袢のまゝの姿になつて居た。

彼女は、布團の中に、自分の身體を埋めて居たが、惱まされて居た今までの自分と同じ現實の自分であるとは思はれないほどの、喜悅に抱擁せられて、快い微笑を泛べながら、周囲の裝飾をじつと見つめて居たが、何時のまにか、すや／＼と眠りに落ちて行つた。

深い快い眠りから隆子が覺めた時には、もう、電燈が點いて居た。桃色のベールを透して、花電燈の光りが、彼女の寐顔を照して居た。

手をのばして、枕もとの小箱の中におさめてある鏡をとつて、彼女は自分の顔を寫して見た。

燃ゆるやうな緞子の布團にくるまつて居る、雪のやうに白い顔、黒ずんだ大きな瞳、漆のやうに黒い房々とした髪、それが、自分ながら、惚れ惚れするやうに、美しく、輝いて居るやうに思はれて、彼女は三十になつても、まだ何時衰へ行くとも想像することの出来ない自分の美しさ、保たれた若さに、堪えられぬ喜びを感じた。

「さうだわ。愛慾淨化といふのは、現實の自分が享樂して居るやうな喜悅ではなからうか。肉體的に異性を欲するといふやうな積極的な衝動がなく、靜かな觸感に満足して得られる境涯ではなからうか。きつと、さうだわ、それより他に何にもないわ」

隆子は恚う呟いて、起き上つた。腕をまくつて、じつと何時までも雪のやうな純白な自分の腕に見とれて居た。

その頃、隆子は夕方になると、よく一人で、自分の邸から、あまり遠くない戸山ヶ原を遺遊することを何よりの楽しみとして居た。

日が沈み行く頃、榛木の林の中を小聲で歌ひながら、あちこちと彷徨うて居た。軽い疲勞を覚えると、彼女は、樹の幹を背にして、暮れ行く野面をじつと見つめて居た。

いくらか、ほてつた肌に、淡絹を透して感ぜられる樹の幹の冷い觸感が、恍惚の境から現實へ彼女の靈を引きもどさうとする感じを與へるのが、隆子にとっては、なつかしいものの一つであつた。

觸感——、それは、彼女の全生活が欲求して居るものであつた。彼女は自分の周圍に存在する、すべての物體を堅く抱いて、その觸感を夢のやうに、懐かしんで居るのであつた。

燃えるやうな、遺瀾ない彼女の魂は、積極的に、すべてのものに、吸ひついて行くやうな力をもつて居た。

愛慾淨化の生活に憧憬する彼女の心は、人間といふものに對して、極めて消極的であつた。自分は性的生活に對して、どれだけ弱いかといふことを知つて居る彼女は、ともすれ

ば、動搖しやうとする自分の心を、抑壓することに、どんなに戰つたか知れなかつた。

彼女は、桃色の部屋で、あらゆるものに對する觸感を體驗した。けれども、榛の木 of 樹の觸感は、堪えられない程の魅惑をもつて、彼女に迫つて來るのだつた。

「生けるものである。あらゆるものと戰つて、自己の生存を願つて居るものである。春になれば、新しき生命力に甦らうとするものである」

恚う思つて居る隆子は一本の榛の木に對しても、人間に對すると同じやうな、無限の愛を注いでやるのであつた。

「あなたは、毎日のやうに、この榛の木に靠れて、何か考へ込んでゐらつしやいますね」
恚う言葉をかけながら近づいて來た十七八歳の美しい少年は、隆子もこの戸山ヶ原でよく見かける少年であつた。

黄昏の中に白く浮き出た美少年の姿をじつと見て居ると、隆子には、光明皇后が、愛欲の絆を断ち得なかつた沙門實忠も、このやうに美しい少年ではなかつたらうかと思はれて、不思議な感情が彼女の胸底に湧いて來た。

「えい。あんまり静かなもんですから、恠うして、じつと野面を眺めて居ると、清淨な心持になつて、どれほど爽やかな気分になるか知れません」

隆子は自分よりも十歳位も若い少年であつたけれど、年齢の相違といふことを超越して、自分と同じ年配の異性といふやうな感情をもつて、少年に恠う答へた。

「私は、この原で、あなたのお姿を見うけるやうになつてから、もう二週間あまりになります。私は何時も、あの向ふの樹の下に横になつて、あなたの姿を見守つてゐました。あなたは、同じ時刻に、同じ道から、同じ歩調で来て、同じ顔して、同じ榛の木の下に、同じ姿態をして、じつと物思ひに沈んでゐらつしやるのを見て、路傍の人であると、單純に考へ去ることが出来ませんでした」

少年の言葉は、非常に力強く響いた。その言葉を味つて見ると、十七八の少年とは思へないほどの物言ひに、隆子はある驚異をさへ感じたのだつた。

「まあ、あなたは、そんなふうに、私を観察してゐられたの……」

「さうです。私は何事でも何物でも、さういふ風に考へることが好きなのです。自分では

あまりに、型に這入つた窮屈な考へ方なんですけれど、さういふ風に考へたいのです。従つて、私の眼に映するすべての物象は、清淨といふ分子に遙かに遠いものなのです。私は清淨なるものを、この宇宙に見ることが出来ない、失望して居るものなのです」

「清淨なものが、宇宙に存在しないと仰言るんです。随分、窮屈な考へ方ですね。そんな風に観ることは、人間として、不幸ではないでせうか」

「確かに不幸な人間かも知れません。けれど、その觀察は、私に、凡ゆる體驗がないからと、責めることは出来ないでせう。人間が他人の前に對して自分の意志を發表するのでなく、自分自身に問うて見た時に、清淨なものの存在を肯定するといふことは、誰が何と云つても出来ないことです」

「それが、あなたの哲學です。でも、私から云はせると、あなたはまだ若いんですもの……これから、あなたの思想は、日一日と、新しきものを體驗するに従つて、變遷して行くと思ひますわ」

「そんな淺薄なものぢやないんです。私には強い信念があるんですから」

「あなたは、美しい容貌の所有者です。あなたの美貌は、自分の力でなく、周囲の力に依つて、あなたをきつと、耽溺の國に導いて行くに違ひありません。あなたは、これまでそんな誘惑を感じたことがありません」

「ええ、それ、ありません。ある女は、私を自動車で誘拐して、ピストルをもつて、強迫したことがあります」

「その時、あなたはどうかすつて」

「私は、観音聲を靜かに誦して居りました」

「まあ、して、その女といふのは、どんな女でしたの、どんな境遇の女でしたの」

「あなたにだから、お話しますが、實は私の父は、實業家なのです。名前を謂へば、あゝあの人かと、誰でも首肯するほど、社會的にも名の知られた男なのです。その父は、三人の妾をもつて居ります。その妾を、私は知つて居りますが、一人の妾はもと赤阪で藝妓をして居たのですが、その朋輩とかいふ女で、二十四五の藝妓でした。坊ちゃん、遊びにいそつしやいといふ電話がかゝつて來たので、私は自動車で遊びに行きますと、一人の女が

遊びに來てゐました。私を非常に可愛がつて呉れましたが、その後、電話がかゝるので遊びに行く度に、その女はきつと姿を見せて居ました。ある日「坊ちゃん、活動見物に行きませう」と誘はれて、自動車の乗りますと、自動車はまっしぐらに馳つて、私が一度も見たことのない海岸の松並木に添ふた道を走つて居るのでした。一時間として、私達を乗せた自動車は、松林の中の旅館めいた家の玄關に横つきになつたのです。其處は、稻毛の海氣館でした」

「それから、どうなすつて」

「私は一番奥まつた洋館の一室に案内せられたのです。部屋に入ると、何か云ひふくめてあつたと見えて、女中は外から扉に錠を下してしまいました——。こんな處に來て、どうするの、活動があるんですか——と訊くと、その女は微笑しながら、何とも云はずに、私を強く抱き寄せて、接吻しようとするのです。私は力の限りに反抗しました。私は女の抱擁から脱れようとしたのです。その時、女は、どうしても嫌だといふのならと云つて、懐からピストルを出したのです。ピストルなんて私は初めて見たのですが、その時、女の強制的な態度に強い反感を抱いて居た私は、眼の前にピストルをさし向けられた時に、今

思ふと不思議な位、落付いた心持になつたのでした。私の母は寺の娘で、何時も、観音經を誦して居りました。信心の強い女でしたから、父が三人の妾を構へて居ても、別に不平も云はず、微笑して父を迎へることが出来る女でした。観音經がどんなことを書いてあるのか、私には判らないんですけれど、危険に遭遇した時に、観音を念ずるときつと危難から脱れることが出来る、教へられて居た私は、聞き覚えの観音經を念じたのでした――

或値怨賊鏡 <small>わくじ げんそく かつら</small>	各執刀加害 <small>かくしつ とうかがい</small>	念彼觀音力 <small>ねん びくわんおんりき</small>	咸即起慈心 <small>けん じつ じしん</small>
或遭王難苦 <small>わく しょうおう じなんく</small>	臨刑欲壽終 <small>りん けい じやくじゆうじゆう</small>	念彼觀音力 <small>ねん びくわんおんりき</small>	刀段尋段壞 <small>とう だん じん だん ぐわい</small>

――私には観音の信仰といふことには、まだ理解することは出来ませんけれど、母から教へられたことが、先入主となつて居て、如何なる場合にでも、観音を念じて居れば、安心して居れるのです」

「それで、女はどうしました。観音經を誦した功德といふものがありました」

「私は眼をつぶつて居たのです。私は観念して居ました。ピストルの引金を、引くことを見なくなつたのです。そのために、反つて恐怖を感じることは、自分の最後を汚すものであると思つたからです。十分間二十分間、私は瞑目して、断片的ではありましたが、観音經を誦して居りました。そのうちに、私の足もとに、女がわつと泣き伏したので、私は靜かに眼を開きました。女はピストルを床の上に投げすてて泣いて居るのでした」

少年は力強く、そして眞摯な語調で、恚う語つて、深い吐息をした。隆子も少年と同じやうな熱心さで、少年の話聞いて居た。

「それで、觀世音菩薩を念じた功德があつた譯です」

「確かに、功德であつたに違ひません。本當を云へば、私は殺されると思つて居たのです」

「どうして、あなたは、その女の要求を拒絶なすつたのです。それほどまでに、思ひを寄せて居る女の愛情に對して、どうして憎惡を感じたのですか」

「其處です。私が宇宙に、清淨なるものの存在を否定するのは、私はその女に對して、憎

悪といふものは少しも感じて居なかつたのです。嚴密に、そして赤裸々な告白をすれば、私はその女の愛情に對して、積極的に好意を抱いて居たやうに思はれたからです」

「それで、どうして、そんな冷やかな態度をお執りになつたのです」

「誰でもが、愛情表現の極致を、性慾的に接近したものでなければならぬやうに考へて居ることが、私には共鳴することが出来ないのです。愛人に對して、接吻を拒絶したからと云つて、愛がないといふ證左とはならないと思つて居るのです」

「それはさうですわ。そして泣き伏した女は、それつきりで、あきらめてしまひましたの」

「いゝえ。悲劇はあとで演ぜられたのです。あなたも御存知でせう。一ヶ月ほど前に、赤阪の藝妓が、箱根の温泉宿で、自殺したといふことが新聞に報導せられのを」

「えゝ知つて居ります。新聞では厭世自殺を書いてありましたわね」

「厭世自殺に相違ありません。死を敢行する人々の心持の多くは、世の中が嫌ひになるからですもの。その女は、私に對して、種々の積極的な誘惑(私はさう思つてゐます)を試みても、私の愛情を、しつかりと自分の魂の中に抱きしめることが出来なかつたのですから、

絶望したのです。死ぬ三日前に、私の許には女の最後の決心を書き連ねた手紙が舞ひ込んで來ました。女が死を決心したと知つて、私には憐愍の情が起つて來ました。無智な女が本當の愛を信ずることが出來ず、死んで行くといふことに、ある腹立たしさ、もどかしさを感じたのでした。私は、彼女の死を想像すると、その死の原因が、私にあるので、責任を感じて箱根にまで行つたのです。私は先づ湯本の福住に泊つて、箱根の山中を探し廻りました。三日目の朝でした。私は早く起きて、朝霧に包まれた裏山にのぼり檜木林の中を歩いて居ると、一人の女が倒れて居るのを發見しました。胸を蹴らせて近づいて見ると、その女だつたのです。——美しい女でしたが、この世の名残りに、あでやかに化粧して、晴れ着を身につけて居りました。毒を嚥んで死んだのですが、さほど苦悶した跡も見えず、燃ゆるやうな緋縮緬の蹴出しが蠟細工のやうに白い脚にからみついて、朝露にぬれて居ました。女は美しい死を遂げて居ました。死んで居るとは、どうしても思へないほどでした。私の眼はいつの間にか涙で一杯でした。私は、彼女が生命を堵してまで要求した接吻を、その時、彼女に與へたのでした……」

少年は恚う語つて、涙ぐんだ眼を見上げて大空を仰いだ。もう夕星が稀らに輝いて、その涙に星が宿つて居るのを、隆子は見た。少年は急に地上に倒れて泣き出した。

「その夜から、私は彼女の幻影に悩まされるのです。夜になると、自分の眼の前に、女が座つて、しく／＼と泣いて居るのが、判つきりと見えるのです。あゝもう暗くなつてしまつた。思ひも寄らぬ長話して遅くなつてしまつた。夜道を歩くことは私には怖いのです」

「あなたほど、強い意志力をもつて居る人がどうして、そんなに怖がるのでせう」

「怖いものを見たからです。私は死骸に接吻してやつたことが怖しくてならないのです。どうしても與へなかつた接吻を、死人に與へた自分の心持が恐いのです」

「女はそれで満足して死んで行けたのではないでせうか」

「私には、それより他に、もつと執るべき道があつたやうに思はれるのです。私は今、一人の女の爲に悩まされてゐます。その一人の女から受ける私の衝動といふものは、箱根で死んだ女と同じです。女といふものは、同じ型をもつて男に迫つて來ると思はれます。それで私は、私の執るべき道を考へてゐるのです。女が幸福な地位に置かれ、私も良心の苛

責に苦しめられることのないやうに——と思つて居るのです。解決の道を発見するため、私は毎日のやうに、この野原に來て、考へるのですけれど……」

隆子はまだ十七八の少年が、これほど眞面目に、物事を考へて居ることが、たまたま懐しくなつて來た。

「今夜、私はもつと／＼あなたとお話したいんですが、私の家までいらしやらないかと。すぐ近くなんですが」

「でも、初めて逢つたお方の宅なんですもの」

「初めに逢つたつて、あなたは私を信じて、あんなお話までして下さつたのでせう。いらつしやいました。私の家には、「桃色の部屋」といふのがあるのです。その部屋には、私以外の者の出入を許さないんですが、あなただけは、その部屋に御案内いたしますわ」と、隆子は勧めた。

「桃色の部屋」と聞いて、少年は憧憬れの瞳を動かした。

「桃色の部屋つて、何をやる部屋なんです」

「私の思索の部屋なのです。私は終日、その部屋に籠つて、思索して居るのです。あなたもその部屋で思索したならば、きつと新しい何かの衝動を感じるでせう。あなたは自分の行く可き道を明かに見出し得るやうになるかも知れませんわ」

「では、案内して下さい。の部屋を見せ下さい」

「滅多な人には足を踏み入れさせないですけれど、あなたにだけは、桃色の部屋をおかし申しますわ」

「どんな部屋でせう。私は早くその部屋を見たいやうな気がします」

「あなたは、その部屋に入つたら、何かの刺戟を受けるでせう。その部屋の氣分に逆つてはなりません。その部屋の氣分に、自分のすべてを融合させてしまはなければなりません」

「そんなに恐い部屋なのですか」

「恐い部屋ではないのです。人間の本然の姿に歸れと、強制せられるやうな部屋なのです。強制と云へば語弊がありますけれども、自覺させられる部屋なのです」

「さうですか。私はその部屋に堪えられないほどの憧憬と魅惑とを感じます。私を案内して下さい」

隆子は少年の心が動いて来るのを見ると、自己満足の微笑を泛べながら、その手をとつて、靜かに歩き出した。

第四勳

「あなたは、この部屋で眞赤裸になつてごらんなさい」

隆子は命令するやうに云つた。少年は吃愕して、戦きながら

「嫌です〜」とつゞけさまに叫んだ。

「あなたは、この部屋に遣入つたら、本然に逆つてはなりません」

「でも、そんなことが出来るのですか。あなたに見つめられて居るだけでも、私は窮屈でならないんですもの」

「あなたは、その着物を脱がなければなりません」と、隆子は重ねて恚う云つた。

「私に死ぬと仰言ると同じです」

「死ぬことは恐しいことです。けれど、あなたは、死ぬ前に、この部屋で着物を脱がなければなりません。私の眼の前で」

「嫌です。ピストルを眼の前に突出されたことよりも、それは怖しい事です」

「どうしても嫌だと仰言るのですか」

「それだけは宥して下さい」

「それならばあなたは、永久にこの部屋から出ることは出来なくなります」

「どうしてです。どうしても出られないのです」

少年は周章して、恐怖の腫を、まんまろくしながら、うしろにいざりさがつて、突然、後ろ向きになつて、扉の引手に手をかけたが、もう錠が下されて、逃げ出すことは出来なかつた。

「逃げようと思つたつて、一步も外に出ることは出来ません。あなたが私の要求を拒絶する間は、あなたは捕虜と同じ身の上なのです」

「そんなことを云つて、私を困らせないで下さい」

「困らせるのではないのです。あなたが、自分を欺いて居るのが、私に憎悪心を抱かせるのです」

「私は自己を欺いては居ません」

「そんなことを云ふのが、自己を欺いて居るのです。あなたは、この部屋に一步踏み入れた瞬間の自分の感情、喚起せられた本能の叫び、それをそのまま、私の眼の前で、表現してほしいのです」

「嫌です。そんな事は私には出来ません」

「あなたは何といふ弱い男でせう。あなたは清淨といふことを、極めて因襲的に考へて居るんですね。それあ接吻することを、不淨なものと思つてゐらつしやる位だから」

「さうです。接吻は清淨な戀愛の表現であるとはどうしても思へないのです。接吻の價値といふものが、どうしても私には判らないのです」

「接吻の價値が、判らないのは、あなたが接吻の快樂を體驗しないからです」

「接吻の快樂、そんなものは、瞬間的、刹那的の快樂ではないでせうか」

「それはさうです。けれど、永遠に、その快樂に、浸つて居られる事が出来るのです」

「それはどうすれば好いのです」

「接吻の中に生存することです」

「さう言へば、接吻の快樂、それを得るために、全生命を傾注しなければならぬのですか。それほど價值のあるものでせうか」

「價值といふことになると、その人の主観的な問題になつて來ます」

「それはさうでせう。けれど、私はそんな氣持にはなれません」

「やがて、時機が來るでせう。あなたはこの部屋の空氣に融合せられて行かすには居れなくなるでせう。あなたはじつと思索に耽つてごらんなさい。私があなたに、赤裸々になれと強制する心持を、理解することが出来るやうになるであります」

「あなたは、どうしても、宥してくれないと仰言るのですか。ようござんす、私はこの部屋に幽閉されて居ませう」

「あなたは眞摯に、自分の蠱の生活といふものを考へなければなりません。獨創的な思索によつて、自分の心の置き場といふものを、よく考へなければなりません」

「あなたは、私にとつては、惡魔であるかも知れません。けれど、今の私の心には、その惡魔を憎む心持はありません」

「あなたが、眞に眼覺める時が、段々と近づいて來るのです」

少年は靜かに眼をつぶつた。

初夏の夜の物惱ましさが、犇々と胸の底に迫つて來るのを覺えた。今まで意識しなかつた自分の靈が蠢いて居るのを見た。何だか、ぞくぞくとするやうな喜悅が、「桃色の部屋」の情調に、溶ろけて行くやうに思はれた。

少年は傍の朱緞子の布團の中で、深い眠りに陥ちて居た。

朝日が高く昇つても、少年は眼をさまさなかつた。昨日見た憂愁さは、もう少年の寐顔に見られなかつた。

あまりに快よく安かな夢路を辿つて居るので隆子は、よほど心を鎮めなければ、その寐

息さへも聴きとれないほど、少年は淡かな息をして居た。

隆子は、少年の顔を、何時までも見つめて居た。一刻も瞳をそらさずに、貪るやうに、その顔を見つめて居た。

午下りになつて、漸く少年は眼をさました。少年は、大きな瞳を動かして、今更のやうに部屋の中を見廻はして居たが、枕もと近くに、隆子が座つて、微笑しながら、自分の顔を見つめて居るのを見ると、少年は赧くほてつた顔に、笑くぼを見せて

「私、よい夢を見て居ました」と云つた。

「どんな夢でしたの」

「どんな形容詞をもつて、お話したら好いでせう。お伽噺の國の夢のやうです」

「あなたは絶えず微笑して居ましたわ。きつと、好い夢を見てゐらつしやるのだらうと思つて居ましたわ」

「美しい花園の中を歩いて居ました。花園の中には、いろ／＼な花、春と夏と秋と冬とが一緒に訪れたやうに、燃ゆるやうなダリヤが咲いて居るかと思ふと、そのかけに涙ぐまし

い忘忽草も咲いて居るのです。チュリップ、ヒヤシンス、アネモネ、パンチイ、スナイトピイなど、もつと／＼多くの花が咲き誇つて居るのです。私はその中を歩いて居ますと、花園の中に、美しい女神が立つて居りました。よく見ると、その女神は、あなただつたのです」

「女神が私だつたんですつて」

「え、そして、私は抱がれるまゝに、女神の傍に近づくと、女神はいきなり、私を抱き寄せて、熱い接吻をなさるのです」

「接吻を、それで、あなたは拒絶しなかつたのですか」

「拒絶なんてことは、考へる餘裕もなく、私の唇は、女神の唇に強く吸ひつけられて居たのです」

「矢張り厭はしいものでしたか」

「いゝえ」と少年が、首を振つて、微笑したのを見て、隆子はたまらない魅惑を感じて、少年にいざり寄つたが、ふと、何かの示現でも受けたやうに、それより以上に、少年に接

近しなかつた。

「今夜、私は、あなたにお願ひがあるのよ」

「どんな事です」と少年は恚う云つて、ちよつと眼を曇らせた。

「恐しい事でも何でもないのでよ。私は、この間、戯曲を書いたのです。釋迦牟尼佛の弟子に、鶯飼摩といふ人があつたのです。そのお弟子の本事譚を創作したのです。清淨太子といふ、恰度、あなたのやうな悩みをもつて居る人のことを書いたものです」

「さうですか。是非とも読んで聞かして下さい」

「夜になつてからよ。妖雲が漲つて居るやうな夜に、その戯曲を読んだなら、その作品にあふれて居る情調と、背景とが、しつくり合つて、作品の價値が、より以上に高められるに違ひありません」

「恐しい事が書いてあるのではないんですか。私が氣絶しさうなことが」

「書いてあるかも知れないわ」

「私は読んで貰はない方が好いのではないのですか、後悔することがあるやうなことでは

ないんですか」

少年は、隆子の作品に對して、ある不安を抱きながらも、恐しきものを見たいといふ好奇心も湧いて來て、夜の來るのが待遠しいやうな氣がした。

第五齣

▽ある比丘の本事譚△

場所 印度
時代 三千年前
人物

大果王	王妃
清淨太子	クリシナ
侍童	甲の女
乙の女	丙の女

兵卒の甲

兵卒の乙

村の若者(狂人)

その妻(死人)

村の者一

村の者二

村の者三

村の者四

村の者五

第一場 大果王城内

大果王城内の一部。上手に清浄太子の居間が二室つゞきとなり、廊下奥に通じて居る。下手は庭園、菩提樹が數本茂つて居る。木の間に王城の城壁が見える。美しい星月夜。清浄太子は最も大きな菩提樹の幹を背にして、じつと物思ひに耽つて居る。

太子「私のために毎夜、盛大な宴會が催される。皆の者は酒に酔ひ面白さうに騒いで居る。何があんなに嬉しいのであらう。面白いのであらう。宴會の席にじつと辛棒して居ることとは、私には堪えられない苦痛なのだ。唄ひ疲れ踊り疲れた女達が、燈火の下に、假寐

して居るのを見ると、あまりに淺間しい人間の姿に顔をそむけずには居られない。小鼓を首にかけてたまゝ眠つて居るものもある。琵琶を挟むもの、篋篋くわくわを持つたものなど、何れも晝間の女のたしなみを忘れてしまつて眠つて居る。半身を露に出して居るもの、涕唾を片頬に流して居るもの、ギリ／＼と齒を噛むものもある。あゝ何といふ物凄いな光景であつたらう。あれが人間の真相かも知れない。虚偽の假面に欺かれて、歡樂の夢に酔ふて居る者を見ると私は憐れますには居られない。(深い吐息をする) 私が三十にもなつて、妻を迎へようとしないので、父王は心配して、この國の中から、美しい女を選び出して、私の心を動かした者には、千金を與へるであらうと、私のために、毎日毎夜、盛大な宴會が開かれる。女達はさまざまの技巧を弄して私の心を試みようとして居る(冷やかな笑を洩して) そんなことで、私の心を動かすことが出来ると思つて居るのは、大きな間違ひだ。私はこれまで、一度も女を抱いたといふ經驗はない。皆が言ふ様に、そんなことが、それほど喜びであるとは、どうしても思へないのだ。女を近づけたなら、未だ見たことのない世界を見ることが出来るであらうと、父王は仰言るけれど、それな

らば、女を知つて居る者が、皆、幸福であるかといふと、それは私には肯定することの出来ないことだ。私の心をひきつけるものは、他にある様に思はれる。私の眞實にぶつつかつて来るものが、他にきつとあるに違ひない。それまでは、私はどうしても本氣になることは出来ないのだ」

(この時、上手から、三人の女が清淨太子を捜しながら来る。太子はそれと氣づいて樹の蔭にかくれる。)

甲の女「太子様は何處へお出なされたのでせう。いつの間にか姿をかくしてしまひなされた、どうなすつたのでせう」

乙の女「皆が踊り狂つて居る時にも、つまらなさうにしていらつしやいました。ほんとうに何を考へていらつしやるのでせう」

丙の女「三十にもなつてお妃を迎へようともなさらず、世嗣がなくなると王様が御心配遊ばすのも無理のない事でございます」

甲の女「別に思ひこんだお方がおありなさる様にも思はれません。太子様のお眼には女と

いふものは何の感興も起さないものと見えます」

乙の女「人間が當然知らねばならぬこと、憧憬なければならぬことを、太子様は少しもお考へなさらないのです」

丙の女「この國の女の中から選び出された妾達が太子様の御心を動かすことが出来ないは何といふ情ない事なまじでせう。妾の微笑に浴した男といふ男は、妾に心も魂も奪はれないものはありませんでした。王様に召されてこの宮殿に来る時に、自信がありますと申し上げただけに、王様に申譯がない様に思はれます」

甲の女「妾が西の國の旅人から教はつた小唄を唄つたら、どんな男でも涙ぐんで、妾に抱きついて来るのでした。そして妾の暖い抱擁の中に、人生の幸福を感じないものはありませんでした。それに太子様ばかりは哀愁をふくんだ小唄の旋律にも、涙一滴も浮べもせず、まるで鹽者のやうにしてゐらつしやいました。物の哀れといふことを感じられない太子様が、やがてこの國の王様になられるのかと思ふと、怖しい事のやうに思はれます」

乙の女「水晶のやうに美しく花園のやうに暖い妾の肌にちよつとでも觸れた男は、何處ま

でも、妾の跡を追つて来ました。それほど魅力をもつて居る妾が、太子に抱きついた時に、太子様は古木のやうに身動きもせず、黙つて妾を押しつけようとなさいました。そして、静かに(よして呉れ)「とうるささうに仰言いました」

丙の女「この上、妾達はどうしたら太子様の御心を動かす事が出来るでせう。とても人間の力では出来ない事の様に思はれます」

甲の女「王様はもう妾達にも絶望なされたと見えて、今日また新に一人の女をお召抱へなすつたさうでございます。妾はその女を見ましたが、妾達の力で及ばないんですもの、あの女も……きつとしくじるに違ひありません」

乙の女「その女の話をもききました。自信があると大きなことを言つてるさうでございますけれど、うまく行つたらお慰みですわ」

丙の女「人間業では駄目ですもの、太子様のお心を動かすことが出来たなら、妾はこの首を賭けますわ」

甲の女「ふと思ひ出した様に」それにしても太子様は何處へいらしたのでせう」

(皆は周圍を捜す。)

丙の女(太子の姿を見出す)「あら、太子様はあんな處にいらつしやいますわ」指す。他の女もその方を見る」

乙の女「死人のやうにみうごきもせず、何を考へていらつしやるのでせう」

甲の女「菩提樹に靠れて……宴會の席でも何時もあのやうにしてゐらつしやる。妾達が捜してゐのを知つてゐても、お言葉さへかけて下さらない。何といふ情ないお方でせう」

(女達は太子の側に行く)

甲の女「太子様、清淨太子様」

(太子はみうごきもしない)

乙の女「太子様」

(うしろからそつと肩を叩く)

太子「お前達は何しに此處に來たのだ。私は恚うして、じつと考へて居ることが、何よりも楽しみなのだ。早く彼方へ行つて呉れ」

丙の女「そのやうな事を仰言らず酒宴の席にお歸り下さいませ。大王様は御心配遊ばして
らつしやいます。」

太子「酒宴の席に居るのが嫌だから逃げて来たのだ」

甲の女「そんなことを仰言るものではございません。妾はあの悲しい小唄を歌つてお聞か
せ申ませう」

乙の女「太子様。妾はこの暖い肌で露にうたれた冷いお軀をあたたためて差上げませう」

丙の女「太子様。妾はお手をとつて、胡蝶のやうな舞うて御覽に入れませう」

(女達は太子の手をとらうとする。太子はそれを振り放す)

太子「お前達の顔は美しい。花をあざむく様に麗しい。けれど、その皮の下には、醜い骨
が連り、汚い肉が盛られて居る。お前達の美は、不淨を盛つた美しい醜のやうなものだ。
そして、世人を惑はし、亂想を起させて居るのだ」

甲の女「まあ、非道い事を仰言います。その様なことを仰言るものではございません」

乙の女「自分の美しさを誇つて居る妾達に、自殺せよと仰言るのと同じでございます」

丙の女「でも太子様、妾達の外面の美は、その醜さを打消すことの出来るほどの美しさで
ないでせうか」

太子「私はお前達の美しさを、夏の圃のやうに厭ふて居るのだ」

(三人の女は「まあ、非道い」と絶望の聲を發する。その時、大果王は王妃と侍童とを
連れて上手から登場する。)

大果王「おゝ太子は此處に居たか？先刻から妾が見えないので、皆は心配して捜して居た。
宴會が酣の時に、主客のお前が席をはづすといふ事は間違つて居る。皆の者は、人生の
歡樂を知らない、いや知らうともしないお前の身の上を憂ひて、毎夜の様、盛大な酒
宴を開いて居るのだ」

太子「父上様、私のために、宴會が催されるといふのでありましたら、それは無意味な事
で御座います」

大果王「どうしてその様なことをお前は云ふのだ」

太子「私はあゝした宴會に出ることが嫌なのでございます」

大果王「それはお前の喰はず嫌ひといふものだ。この様な美しい女達は、お前が人間らしい生活に這入る様につとめて居るのではないか？」

王妃「お前がその年になつても、妃を迎へぬので、國中の者は、世嗣がないのを心配して居ます。お前はどういふ女が好きなのですか？この國から選んだ美しい女が氣に入らぬとなれば、家來を他國に遣はして、美しい女を搜がさせても好い」

太子「私は女といふことをこれまで考へたことがありません。又、考へようと思はないのでございます。私の眞實にぶつつかつて来るものは、もつと他にある様に思はれるのでございます」

大果王「まあ、好い。何れ眼覚める時もあるらう。だが、俺はこの年になるまで、何百度となく戰場に出て、これだけの大國を建設することが出来た。それは、自分の慾望を満足させる爲であつたとも言へないことはないが、子孫のためでもあつたことをお前はよく考へて見るが好い」

王妃「この大國が三代もつゞかずに、他國の爲めに滅ぼされるかと思ふと、妾は、ほんとう

に悲しくてならない。お前は幼い時から、妾の言ふことに叛くことはなかつた。妾は行く末を楽しみにして居ました。母の心もよく考へてお呉れ」

太子「父上様や母上様には、私の心持がよく判らないのです。どうぞ、放つて置いて下さ

51

大果王「どうしても好い。お前の好きな様にしたが好い。さあ、皆の者。これから、酒宴を開直すでしょう。太子、お前も氣が向いたら、あとで来るが好い」

太子「有難うございます」

(大果王は先頭に立つて上手に入る)

王妃(太子を顧みて)「お前もあとでお出なさい。(侍童に向ひ) お前は太子のお側に居たが

好51

侍童「長りました」

(王妃につゞいて三人の女も上手に入る)

侍童「太子様、夜露に打たれるのは、身體の毒でございます。お部屋でお休みなされては

如何でございます」

(太子はそれに答へもせず、じつと空を仰いで居る)

太子「あゝ静寂な星月夜だ。私の心は、限りないあの大空に飛んで行くやうな気がする。(快い笑を洩す。しばらくして)天地の創造が未だ新らしく、凡ての星がその最初の光輝を放つて輝いた時に、神々は天に集つて——あゝ完全の一大圖、雜りなき喜び——と歌つたさうだ。しかし、その時一人の神は、光の鎖が何處か切れた様だ。星の一つが失はれた——と叫んだので、神々の歌は止んだ。失はれた星は最善の星であつて、凡ての天の光榮であつたさうだ。その最善の星を失ふたことに依つて、世界は唯一の喜びを失つたので、その日から、失はれた星の搜索は始められたが遂に探し出されなかつたさうだ」(太子はじつと空を仰いで居る。と静寂を破つて若い女の泣聲が聞える。太子はその泣聲に耳をすます。傍に居る侍童を顧みて)

太子「あの聲は何の聲だ。これまで聞いたことのない聲だ。あの聲は鳥の聲よりも哀れに聞えて来る」

侍童「太子様、あれは女が泣いて居る聲でございます。いまにも死んで行く女の泣聲の様に思はれます」

太子(女の泣聲に耳を澄して居る)「あれが女の泣聲なのか？自分は初めて聞いた。行つて何者か見とどけて來い」

(侍童は上手に去る。太子は女の泣聲に耳を澄まして居る。)

太子「あれが女の泣聲なのか」(獨言)

(侍童歸つて來る)

侍童「太子様、私が申しました様に、お城の外で女が泣いて居りました。若い美しい女でございます。話を聞いて見ましたら、夫に捨てられた女ださうでございます」

太子「それは可哀さうな女だ。よく勞つて、今夜は次の部屋に泊めてやつたが好い」(居間の方を指す)

侍童「長りました」(再び去る)

太子「女の泣聲といふものを、自分は初めて聞いた。夫に捨てられた女だといふが、何と

いふ哀れな身の上であらう。女の笑ひさどめく聲は聞き飽きる様に聞いた。自分はそれを何でもなしに聞きのがして来た。だが、女の泣聲は初めてだ。女の泣聲は女の生命かも知れない。自分はこんなに心を惹かれた事はない。今夜、泊めてやつたら、嘸喜ぶであらう」

(侍童はやがて女を上手寄りの太子の居間の次の部屋に連れて来る。太子は深く考へ込んで居る。侍童は太子の側に来る。)

太子「どうだ。女は喜んで居たか？」

侍童「太子様の思召だと申しましたら、その女はどんなに喜んで下さいます。幾度もお禮を申しました。女の名はクリシナと呼ぶのださうで下さいます。涼しい瞳には涙を浮べて喜んで居りました」

太子(満足さうに)「さうか、今夜は好いことをした。人間は好い事をした時ほど喜ばしい事はない。哀れな者は勞つてやらなければならぬ。」

侍童「左様で下さいます。その女は申して居りました。清淨太子様の御噂は承つて居りま

したがこんなお優しいお心をもつてお在でとは夢にも思ひませんでした。お目にかゝつてしみく〜とお禮を申し上げたいと申して居りました」

太子「逢ふほどの事でもあるまい。哀れな者を救つてやることは、當然の事だから」

侍童(ふと思ひ出した様に)「太子様、もう夜も更けました。夜露にぬれるのは、御身體の毒で下さいます。もう、お寐みなされてはいかゞで下さいます」

太子「御殿の方の酒宴は、もう終つたと見えるな。女達が、だらしなく、寐亂れて居るところであらう。今夜は、淺間しいあの光景を見ないだけでも、どんなに好い氣持だか知れない」

(太子は獨言のやうに、侍童に語るやうに云つて、靜かに居間に行く。窓近くの机に凭つて、ほつと軽い息を吐く。そして隣室の氣配に心を動かして居る。と、女の泣き聲がまた聞えて来る。)

太子「あの女はまだ泣いて居るな。思ひ出しては泣いて居るのであらう。夫に捨てられたといふことが、そんなに悲しいことであらうか。あんなに嘆いては、死んでしまふやう

なことはあるまいか（侍童に）、俺はこれから讀書しなければならぬ。俺にかまはず退つて、もう寐てはどうだ」

侍童「有難うございます。それではごめん下さいます」

（侍童は廊下傳ふて上手に去る。女の泣聲がまた聞える）

太子「どうしたといふのだらう。何だか氣になつて仕方がない」

（太子は立上つて、足音を忍ばせて、次の部屋に行く、（舞臺少しづつ廻はる）淡い灯の下に、若い美しい女が泣いて居る。太子はじつと女の姿を見て居る。女はそれと知つて居ても顔をあげない。）

太子（女の肩をそつと叩いて）「どうして、何時までも泣いて居るのだ。何がそんなに悲しいのだ」

（女は泣ぬれた顔をあげて、太子の顔を見る。哀愁の中に男の心を引つけずには居れないほどの妖艶さがある）

クリシナ「太子様、身にあまるお情を蒙りまして有難うございます」

太子「もう嘆くのはよしたが好い。どんなに嘆いたからとて、一度お前を離れた夫の心が昔のまゝに完全に、お前の胸には歸つて来ないであらう」

クリシナ「太子様、妾はこの廣い世の中にたつた一人ぼつちになつたのでございます。どうして嘆かずには居られませう。でも、思ひがけなく、太子様の御慈悲を受け、この上の喜びはございません。」

太子「たゞこれしきの事が、お前にはそんなに嬉しいのか？」

（女は太子にすり寄つて来る）

クリシナ「妾の夫は結婚當時は、世にかけがへのないものの様に、妾を大切にし、愛して呉れました。それほどの夫が、私よりも美しくない戀人を他に求めましてからは、妾にはよそ／＼しく、遂に今夜、妾を捨ててしまつたのでございます。男といふものは一人の女では満足が出来ないと見えまして、妾の夫の愛は、妾よりも醜い女に移つて行つたのでございます」

太子（女の言葉をじつと考へる）「お前ほど美しい女はこの宮殿には居ないと思ふて居る。」

それほど美しい妻を持つて居る男が、妻よりも醜い女に心を移すといふことはどうした理由であらうか」

クリシナ「醜い女でありましても、妾の美さより以上の、何にか好いものを持つて居たの
でございませう」

太子「なるほど、さうでもなければ、お前の夫は、お前ほどの美しい女を捨てる様なことはしないであらう。そして、お前は夫から捨てられたので、悲しくて泣いて居たのか」
クリシナ「男でも女でも一度異性を知りましたなら、何時までも忘れることの出来ないものでございます。夫に捨てられた妻は、頼る人のない淋しい女となつてしまひました。どうして、嘆げかずに居られませう。妾はこのまゝ死んでしまひたうございます」
(女は太子に取纏る。太子は女を押しつけのけ様ともしない。太子は女の腕に抱かれながら妖艶な美に打たれて居る―舞臺は薄暗くなる)

太子(薄暗い中から太子の聲が聞える)「失はれた一つの星を、私が見出したのだ……(その聲は狂喜に満ちて居る)その星は私の靈を救ふた處の星であつた。天の光榮の星であつ

た。最善の星であつた……クリシナ……クリシナ」

クリシナ(囁言のやうに)「太子様、妾に死と愛とを一緒に與へて下さり」

太子「クリシナ」

(舞臺は薄暗いまゝ廻る)

第二場 大果王城外

石垣越に凜然たる王城の藝が見える。上手寄りに門があつて開閉せられる様になつて居る。門の前に樹木がある。

兵卒の甲乙が女の屍を擔いで門から出て来る。そして女の屍を石垣の外に捨てる。

兵卒の甲(女の屍をじつと見て)「昨夜華やかな婚姻の席から掠はれて來たのだ。太子様の仰言ることをどうしても聞き入れずに自分の夫の名ばかり呼んで居た」

兵卒の乙「美しく着飾つた花嫁姿を見て、太子様は野獸的な笑を浮べて居られた。それを見て俺は戦かすには居れなかつた。舌を噛み切つて死ぬ……その心持を俺は理解する事が

出来るのだ」

兵卒の甲「けれど死ななくとも他に道があつたらうと俺は思ふ。太子様の御傍に居て榮耀な生活も出来るのではないか」

兵卒の乙「俺はお前と同じ心で、この女の死を考へることは出来ないのだ。清浄太子様の思召で、この國中の女といふ女は、手當り次第に掠はれて來た。そして太子様の慰みものとなつた。それらの女の中には、人妻もあつた。婚約のある女もあつた。生娘もあつた。何百人といふ數の女だつた。華やかな婚姻の席から掠はれて來たこの女は、無暴な太子様の慾望の犠牲となつて、舌を噛み切つて死に、その翌朝は犬ころのやうに城外に捨てられてしまふなんて、何といふ悲惨なことであらう。何といふ恐い事であらう」

兵卒の甲「お前はそんな立派な正しいことを考へて居るのか」

兵卒の乙「俺は何だか、恐いことが、近いうちに、この國に起る様に思はれてならないのだ」

兵卒の甲（戦きながら）「恐い事が起る？それはどんなことだ」

兵卒の乙「あの太子様が、どうして悪魔に魅られたのか、美しい女とあれば、人妻であらうと娘であらうと、片つばしから掠つて夜のお伽を命ぜられる。新妻を奪はれて發狂した男もある。子供まである妻を掠はれて首を縊つた男もある。まるで地獄の出來ごとの様だ。昨日、長者の娘のスペインといふ女が、裸體になつて、男達が群つて居る中を歩き廻つたさうだ。男達は身體に一糸もつけず歩いて居るので、何といふ恥知らずだと嘲つた時に、スペインは、女の前で女が裸體になるといふことが什して恥しい。この國の男は皆女のやうに意久地なしばかりだ。太子に復讐する勇氣のある者は一人もない。復讐することが出來ずに居る。この國の中で、男は清浄太子ばかりだ。自分も太子の前では着物をつけるであらうと云つたさうだ。男達はそれを聞いて一言も言葉をかへすことが出來なかつたとのことだ。この國にも、しつかりした男も居る筈だ。今日か明日か、或は

「二三日中に、村の者はこの王城へ押し寄せて來るに違ひない」

兵卒の甲「恐い世の中となつて來たな。おう、向ふから誰か來るやうだ」(指す)

兵卒の乙「俺達はあの木蔭にかくれて様子を見て居よう」

(二人は上手の木蔭に身を秘める。)

村の若者が上手から来る。發狂して居る。眼を泣きはらして怨めしさうな顔して、高い城壁を覗くやうに、のびあがり／＼泣きながら来る。男は足もとに、捨てられた女の屍をじつと見る。しばらくして)

村の若者「おう。ゴータミだ。俺の妻だ(狂喜して)お前は どうしてこんな處に一人で寝て居るのだ。俺は昨夜中お前を探し廻はつた。丘に登つてお前の名を呼んだ。阿夷羅跋提あいらぼつだ河畔かたに立つてお前の名を呼んだ。けれど、お前は何の返事もしなかつた。俺は悲しくなつて、河の中に飛び込まうとさへ思つた。ゴータミ(取縮る)。お前はこんな處に寐て居たので、返事をしなかつたのだな。でなければ俺の聲が聞えた筈だ。ゴータミ。お前は俺が來たのに、何故、眼をさまささないのだ。やがて、日も出づるであらうに(泣く。)

(木蔭にかくれて居た二人はこの有様を見て居る。)

兵卒の乙「あれを見る。あの男は氣が狂つて居るのだ。自分の妻が死んで居るとも知らな
うのだ」

(若者は女の屍を抱く、ロブけする。)

村の若者「お前の唇は冷い。昨夜はあんなに暖かつたのに、どうしたといふのだ。ゴータミ。眼をさましてお呉れ。につこり笑つて呉れ」

兵卒の甲「死んで居るとも知らずに接吻して居る。可哀さうに」

兵卒の乙「太子様が、あんな無茶なことをなさるので、この國には、どんなに多くの悲劇が演ぜられて居るか知れない。俺は痛ましいこの光景を見るに忍びない」

(村の若者は女の屍を抱いて居る。取亂された女の着物をつくろつてやる。)

村の若者「ゴータミ。お前は俺の顔を忘れてしまつたのか？思ひ出して呉れ／＼」

(泣く)

兵卒の甲「向うから村の者が大勢来る。皆は手に武器を携へて居る。何の爲めに押し寄せ
て來たのだ」

兵卒の乙「俺が想像した様に、村の者はいきり立つてやつて來る。恐しい事が起るに違ひ
ない。俺達が此處に居ると、事はいよ／＼面倒となるに違ひない。門の中に這入つて居

よう」

(二人の兵卒はそつと門の中に入る。下手から村の者が大勢、手に武器を携へて来る。)

村の者一「何といふ怖しい事だ。俺達はこんな恐しい事が、世の中に起つて来ようとは思はなかつた。」

村の者二「清淨太子様は、女などには目をくれないといふ程堅いお方だとの評判だつた。王様は世嗣がないと御心配なされて、美しい女を集めて、太子様の心を動かさうとなされた程の堅いお方だつた」

村の者三「王様にお願ひして、太子様を何とかして貰はなければ、俺達は安心して眠ることが出来ない。女達は顔色を蒼くしておびえて居る。猛獸に襲はれたやうに震へて居る」

村の者四「若い男が女を抱いて泣いて居るのを見つけて」其處に居るのは誰だ。泣いて居るのは誰だ」

村の者五「お、隣村のタキシヤではないか。昨夜、結婚式をあげて、酒宴の最中に、美しい花嫁を太子様に掠はれたといふ話を聞いた」

村の者一「さうだ。隣村の者は、タキシヤの行方が知れないと大騒ぎして居た」

村の者二「死んだ女を抱いて、何にか話をしかけて居る。接吻して居る」

村の者三「氣が狂つて居るのではないか」

(皆は若者を圍繞く)

村の者四「タキシヤ、お前はどうしたのだ」

村の若者「ゴータミが昨夜何處へか行つてしまつた。俺は夜中、探し廻つた。ゴータミは此處にて寐居た。俺を見ても、笑ひもしない。俺のことを忘れてしまつたのだ」(泣く)

村の者五「氣が狂つて居る。死んでゐる女を生きて居ると思つて居るのだ」

村の若者「ゴータミの唇は昨夜暖かかつた。けれど今は氷の様に冷い。ゴータミ、何とか言つて呉れ。思ひ出して呉れ」

村の者二「あんなことを言つて居る。可哀さうにな」

村の者一「怖しい世の中となつた。俺達はどうしてこんな時代に生れたのであらう。クリシナといふ女が、太子様を誘惑したのださうな。何といふ憎い女であらう。殺しても飽

き足りない女だ。クリシナがそんなことをしなかつたら、太子様は女といふものを知らずにすんだに違ひない。そしたらこんな怖い事は起らないのだ。憎いのはあのクリシナだ。あの賣笑婦だ』

村の者四『俺はもう恚うして居ることは出来ない。昨日、スバンが言つた通りだ。太子様の無暴を黙視して居る俺達は、ほんとうに意久地なしたつた。王様にお目にかゝつて、太子様の身體を貰ひうけよう。そして思ひ存分の復讐をしなければ、俺は承知することが出来ないのだ』

村の者五『さうだ。王様が太子様を俺達に引渡さなかつたら、その時には、俺達も覺悟をしなければならぬ』

村の者一『王様は話のよくわかるお方だ。太子と一國の運命を秤にかけて、太子様を俺達に引渡されるに違ひない』

村の者一同『さうだ〜』

村の者四（門を叩く）『お願い申します〜』（門内から兵卒の甲と乙とが出て来る）

兵卒の甲『お願いとは何だ』

村の者四『王様にお目にかゝりたいと思つて参りました。どうぞお取次ぎ下さい』

兵卒の甲『王様はまだお寝みなされて居る』

村の者一『私達が参りましたことを、お告げ下さいますなら、王様はお目にかゝつて下さいますでせう』

兵卒の甲『手に〜武器を携へて、どうしようといふのだ』

兵卒の乙『お願いの筋があるなら、事を荒立てゝはならぬ。王様がこの有様をこらんになつたらどんなにお怒り遊ばすか知れない』

村の者一『お心を添へて下さいまして有難うございます。私達は、王様に向つて、不敬なことを致さうと思つて参つたのではありません。安心して生活して行くことが出来る様に、王様にお願ひに参つたのでございます。』

兵卒の乙（首肯いて）『うむ。判つた。王様はその旨をお傳へするから、暫く待つて居たが好す』

村の者一同「よろしくお願ひ申します」

(兵卒の甲と乙は門内に這入る)

村の者一「王様はお目にかゝつて下さるに違ひない。その時、我々はどの様にお願ひした
が好いか、好い考を持つて居る者は、遠慮なく言つて呉れ。」

(一同は顔を見合はせる)

村の者二「昨日、スパンが言つた様に、太子様の御身體を貰ひうけて、思ひ存分に復讐し
てはどうだ」

村の者三「復讐とはどうするのだ」

村の者四「恨みを晴すのだ」

村の者一「太子様を殺してしまへといふんだな」

村の者二「たつた一人のお世嗣だ、王様はなか／＼御承知なさるまい」

村の者一「王様はなか／＼物のわかつたお方だ。此處に死んで居る女を御覽になつたなら
ば嫌だとは仰言らないであらう」

村の者三「それが出来ることなら、さうしたが好い」

(門が開く、大果王は、兵卒の甲乙を連れて、群衆の前に立つ。村の者一同は王を禮拜
する)

大果王「願ひがあるとの事だが、どんな願ひなのだ。理論リジウの立つた願ひなら、わしはよろ
こんで承知するが」

村の者一(進み出て)「王様、どうぞ、此處に死んで居る女を御覽下さいませ。自分の妻が
死んで居るとも知らずに發狂したこの男を御覽下さいませ」

(大果王は、その方に目を向ける、惨しい光景を見て目をそむける。)

村の者一「この男はタキシヤといふ村でも評判の親孝行者でございます。女は昨夜、タキ
シヤと結婚したゴータミといふものでございます。華やかな結婚の席に、清淨太子様の
御家來が見えて、泣き狂ふ花嫁を掠つて行かれたのでございます。そのためタキシヤは
發狂してしまいました。ゴータミは御覽の通り舌を嚙んで死んだらうございます。そ
してゴータミの屍は犬ころのやうに、この往來に捨てゝあつたのでございます」

大果王（涙を拭ふて）『誠に申譯のないことをした。わしがあやまる。どうか、太子の罪を許して貰ひたい』

村の者一（村の者四を指して）『王様、この者の弟の妻に三人の子がございました。村でも評判の美人といふのが、太子様のお耳に入つたと見えまして、ある日、掠はれて行きました。そのために絶望して可哀さうに、三人の子供を刺し殺し、自分は首を縊つて死んでしまいました。王様、この様な悲しい出来事は、國中到る處にあるのでございます』

大果王（唸る）『わしはどの様にしてお詫びしたら好いか判らない。そして、それに對するお前達の要求といふものがあるのか？太子の罪を許して呉れるなら、わしは、向う三年間、租税を免するであらう』

村の者一『王様、私達は王様のおかげで、この國に生活して居る者でございます。租税を納めるといふことは、私達の義務でございますから、その様なことをお願いすることは出来ないでございます。王様、それとこれとは別問題でございます』

大果王『それではどうしようといふのだ』

村の者一『王様、この哀れな女の屍をよく見て下さい。この悲劇を償ふためにはどうしたら好いか。王様御自身の身になつてお考へ下さいまし』

大果王（默然として居る）

兵卒の甲『お前達は清淨太子様に復讐しようと思つて居るのか、太子様のお身體を貰ひ受けようと思つて居るのか。王様のお心にもなつて考へて呉れ。たつたお一人のお世嗣ではなつか』

村の者四『私達が、いや國中の者が、満足することの出来る様な解決をして頂けばよいのでございませう』

大果王『太子の身代りとしてわしの命は欲しくはないか』

村の者一『御慈悲の深い王様、私達をそんなに苦しめずに下さう』

大果王（涙をばらばらとこぼして）『家のために一人を忘れ、村のために一家を忘れ、國のために一村を忘れ、身のために世間を忘る……お前達の願を叶へて、清淨太子を引渡すであらう』（大果王は失身したように踰越くのを兵卒の乙は王を抱く）

兵卒の甲「お前達は、太子様のお身體を申受けてどうする積りだ」
村の者「大王様、有難うございます。」

(一同は欣喜する)

大果王(兵卒の乙に向ひ)「太子を此處に連れて来い」(乙は躊躇する)
大果王「清淨太子を連れて来い」と叫ぶ。

(兵卒の乙は思ひ切つて門内に入る。)

—幕—

第六勦

あまりに深刻な描寫、あまりに凄慘な情景に、少年は懊惱せずには居られなかつた。戯曲の中の場面が、思ひも寄らぬ方面に展開して行つたり、或は自分がとても想像だに及ばない思想が、遺憾なく描かれて居るのを見ると、少年は幾度か讀むことを中止してほしいと思つたが、作品の中に秘されや不思議な力は、彼の心を何處までも引摺つて行つた。

「この作品に對するあなたの感想は」

「私などには、とても理解の出来ぬことです」

「そんな事はないことよ。あなたは自己を偽つてゐらつしやるんだわ」

「私の心には、あまりに強く交響するものでありました」

「それだから、いけないといふことはありませんわね」

「さうです。この作品の中にあふまれて居る思想や哲學が、私には理解されないのです。

清淨太子が、どうして、性的生活に狂的になつて行つたかど、私には理解されません。それを理解するには、それを體驗しなければならぬでせうか」

「體驗しても、それがその人にとつて、主觀的な問題ですから、第三者からは、何とも云へないことです。私などは、夫のある身ですけど、十年あまりも、孤獨の生活をして居るのですから」

「それはさうでせう。でも、體驗すれば、清淨太子の心持が、理解することは出来ますねえ。狂的になつて行くのが本當か、間違つて居るかといふことは、私自身の問題として考

へて見るときに、解決はつきますね」

「それで、あなたは、體驗して見たいといふ欲望が起つて來てゐるんですの」

「來てゐるといふことはありません。私にはまだ、さうした生活を不淨なものと考へる心が強いやうですから」

「體驗するにはあなたは自分の道徳的觀念を確立してかゝらねばなりませんわ」

「さうです。清淨太子のやうな暴君的な行爲は、今日の社會では許されないことですからね」
「種々の女に對して、種々の體驗を得るといふことは、一夜の快樂を貪るだけでは味はないことですよ」

「私もさう思ひます。そして人間の踏むべき道は正しく踏んで行かなければならないといふ正義の觀念が、私の心から離れるやうなことはあるまいと思ひますから」

「それではいけないと思ひますわ」

「私は、自分の行くべき道は、どういふ風に選んだら好いか、私の心はいよ／＼深く迷つて行くやうです。」

「それは迷ひではありません。迷ひといふのには、冷靜さが無いのです」

少年は暫く考へて居た。隆子はその顔をじつと見つめて居たが、少年の眼の輝きが、昨夜とは、異様に輝いて居るのを見ると、隆子は、何だか恐しくなつて來た。

その夜も少年は「桃色の部屋」に泊ることになつた。少年は、柔かい布団の中に埋まりながら、昨夜とは、全然變つた感情に昂奮して何時までも眠れないのを見て、隆子は急に少年の心が、いとしくなつて來た。

隆子は、自分から積極的に、少年に對して誘惑的態度を示したが、それに引づられて來るのを見ると、平凡な男の心理としか思へずに、ある失望を感じたのだつた。

もつと／＼強い信念と、愛慾嫌惡とが、この少年にあつてほしかつた。性的體驗のある隆子は、性に殉じようといふ氣持は少しもなかつた。少年に對して、積極的な自分の態度は、所謂、火あそび——といふやうな一種の遊戯的な行爲であつた。そして純情で、而かも理解力をもつて居る少年を、奔弄して行かうとする心持が彼女の胸底に蠢動して居た。
「自分が考へてゐた様な氣持で少年を愛する心持を、社會はどう批評するであらうか」と、

隆子は考へて見た——。自分はこの少年に對して、性的衝動を感じて居ない。自分は十年餘の孤獨の生活が、嚴密な意味から性的に冒瀆されて居ないと断定するには、自分の良心に對して、ある恥しさを感ずる。が、偶然的に起つた性的慾望のために、純情な少年を瀆す、犠牲にするといふことは、何だか、恐しいこと、罪の深いことのやうに思はれるのであつた。

「慈悲あればこそ、觀世音菩薩は、衆生を救うためには、體を恐しい姿として、雷の如く衆生を戒め、又與樂のためには、大雲の萬物を覆ふ如くに、普く衆生を覆はれる。恚うした觀世音の愛から考へれば、すべての方便として、最高の目的を達するためには、許さるべきものである」——隆子は、こんなこと考へると、少年に對する自分の心持に對して軽い氣持となることが出來たが、それよりもこの少年の心理を、各方面から考へて見る事に興味心が起つて來た。自分の手から離れて、大海に投げ出された時のその少年の運命を考へて見ると、かなり恐しい誘惑が降つて來ることは明かに想像せられた。

もつと恐しい惡魔のために、再び救ひ上げることの出來ない墮落の淵に投げ込まれて、

永遠に光明を仰ぐことが出來ないやうに思はれて自分が少年に對して『悲愷の觀音』となるといふことも美しい行爲のやうに思はれた。

自分は、この少年が、性的に無智である。無智であるがために、表面的にそれを恐れそれを厭うて居る。けれど、それを理解した時に、此の少年は、必ずや、猛進して行くに違ひない。さう思ふと、彼女は、自分のかりそめの惡戯から、少年に對して、性的自覺の氣運の到來を早めたことが許さるべきことでないやうに思はれた。

「さうだわ。私は自分の罪を悔むために、弱き心をもつて居るこの少年を救ひ出さなければならぬ」

隆子はこの願を建てると、救ふべき道について、考へなければならぬことが、澤山あるやうに思はれた。

その意味から、自分が創作した戯曲を、少年に讀んで聞かせたことは、決して無意義なことではなかつた——と思ふと、明るい氣持になることが出來た。

少年はすやくと眠つて居た。昂奮した感情から脱れて、眠りに入つた少年の顔は、朗

かなものであった。

朝になつて、隆子は、少年に

「あなたは、今日は自分の家におかへりなさい」と云つた。

少年はこの言葉を聞くと、失望して惱ましさうな顔をして居た。

「もう一日、この部屋に置いて下さる」

少年は、なつかしき夢の跡を追ふやうに恚う云つたが、昨日まで、やさしい姉のやうな心持で接して居た隆子が

「それはいけません。もう、あなたをこの部屋に置くことは出来ないのです」と、凛とした聲で云つたので、氣の弱い少年は、何時しか、涙ぐんでしまつた。

隆子は涙ぐんで居る少年の顔を見ると、可愛さうな氣もしたが、一面から観察して見た少年の心は、かなり危険な方面に歩みに向けて居るやうに思はれたので、昨日までのやさしさは見せずに

「あなたは、今日は自分の家にかへらなければなりません」と累ねて云つたので、少年は

力なく立ち上つた。

「桃色の部屋での二日の生活は、私に新生活のスタートを切らせたやうに思はれます。あなたは、私に未知の世界へ行く道を教へて下さいました。それは、私にとつては、好いことであるか、悪いことであるか、現實の私の智慧では、批判することが出来ません。すべての解決は、時が、時機が齎らしてくれるでせう。」

別れる時に、少年は恚う云つた。

「あなたの心が向いた時に、またいらつしやい。けれど、あなたは、私の邸に、桃色の部屋があるといふことを、社會に知らせてはなりません」

少年は首肯した。

「あなたは、これから世の中を見たが好いのです。あらゆることを、體驗したが好いのです。あなたは窮屈な人生觀をもつて、すべてを律して行かうとするのは、あなたの精神の成長を阻害するものなのです」

隆子は恚う云つて、少年を門前まで見送つた。

「心が向いたらいらつしやい。その時には喜んであなたを迎へませう」
機ましげな姿して、去り行く少年の跡を、隆子は茫然として見送つて居た。

第七齣

名門に生れて、當代並ぶものない美貌の持主たる隆子の結婚が傳へられ、盛大なる結婚式が擧げられた時に、美しき妻を迎へる陽一の幸福を羨まぬ者はなかつた。が近衛陽一は結婚して三ヶ月目に、學究のため渡歐することになつた。

その時、隆子の兄夫妻も、渡歐するといふので、よき道連れであるからと、隆子も一緒に佛國に行くことになつた。新婚の夫婦は、一年間ほど、南歐北歐の諸國を見物して居たが、陽一は

「三年間、研究しなければならぬから、お前は日本に歸つて、待つて居たが好い」と云ひ出したので、隆子は温順しく首肯した。

隆子は日本に歸つて、三年の月日が待遠しくてならなかつた。いよいよ約束の三年の月

日が廻つて來たが、陽一からは

「研究すればするほど深くなつて行く。まだ研究に十分ではない。あと二年で歸朝する」との手紙が來たので、隆子はがっかりしてしまつた。

美しき妻を残して居て、歸國しようともしない夫の心を思ふと、自分よりも、學究に熱注して居るその心が恨めしかつた。燃ゆるやうな思ひを書き連ねた手紙さへ、夫の歸國を促すに、何等の魅力もなかつたかと腹立たしくも思はれた。

二年の月日はまたもめぐつて來たが、陽一は歸國しなかつた。恚うなると、社會は彼女や陽一に對して、種々の噂をするやうになつた。

「性的缺陷のある女に違ひない」

「夫婦の性格に相容れない處がある」

「隆子には意中の人があつて、夫婦の間の愛情は冷たいので、陽一は歸國しないのであらう」

「陽一は、佛國の女と同棲して、その間には二人の子供まである」
こんな噂が、隆子の耳に遣入ると、隆子には首肯せられる點もあつて、悶々の月日を送

つて居た。

自然のなり行きにまかせようといふ氣持になつた彼女は、社會のさうした噂の中に、恬然として、氣高さを示して居た。

けれど、性的生活を一度體驗して居る彼女にとつては、三十近くになると、堪へられない淋しさが、しみじみと迫つて來た。が多くの善男善女から

「觀音様の化身」とまで云はれて居る隆子は、孤閨の淋しさに堪えかねて——といふやうな弱味を見せたくなかつた。隆子は中年の女の危機にありながら、その貞操を疑はれなかつたので、社會は彼女の生活を非難することはなかつた。

「觀音様の化身」と崇敬せられて居る自分の姿を、冷靜に見る時に、隆子は淋しくなつた。性的生活に超越して居ない自分でないか、迷夢の境涯にある自分でないか、瞋恚の炎に燃えて居る自分ではないかと思つと、微笑を禁じ得ないこともあつた。

松原伯爵の令姫で、ある實業家の妻となつて、十年間も結婚生活をして居た春子が、若き戀人を得て、古稀に近い夫を捨てて、戀人の許に走り、社會の問題となつた時などは、

隆子なども、對照の女性として、何かにつけて、引張り出されて、社會人の勝手な姐上へのせられたが、そのことがあつてから、世間には惡戯な者も多いと見えて、隆子の許には毎日のやうに、名も知らぬ男や女からの手紙が來た。

隆子はそんな手紙を見ることが好きだつた——自分に對する世評の一端も窺はれるからだつた。

法學士で、某會社の支配人であると稱する男からは、隆子の夫婦生活に同情して、十年の貞節を守り、性的生活を超越して、精神救濟事業に携つて居ることは、日本婦人の典型であると思つた手紙が來た。

隆子は、その手紙を見ると、何んで、こんな手紙を寄越すのだらう、世の中には、暇な人もあるものだと思つて、返事を出さずに置くと、それから數日の後に——御返事有難うございました。私はあなたの現實生活とその心境とを知つて嬉しく思ひます。何時かお目にかゝつて、お話をしたいと思ひます——などと書いてあるのを見て、隆子は愕かされたりした。

手紙の文句や筆蹟を見ても、それほど素養のない男でもないやうに思はれた。法學士位の肩書のある者ならこの位の手紙は書けるだらうと思つたが、あまりに馬鹿くしく思はれて、隆子は火中に投じてしまつた。

その後、しつきりなしに、その法學士といふ男から手紙が來たが、隆子は開封せず火中に投じてしまつた。

手紙を寄越した者はまだあつた。齒のうくやうなレターペーパーに、くすぐつたいやうな甘つたるい文章が並べられて、下手な歌なども書いてあつた。中には、初對面の彼女の許へ、憶面もなく訪ねて來る男などもあつたが、隆子は紹介なしには面會を謝絶して居た。ある日、若い女が訪れた。

初對面の女であつたが、その日は妙に淋しい思ひのする日であつたし、殊に女性といふので、安心して逢はうといふ氣持になつて、女中に命じて、奥の十疊の部屋にとほして置いた。

すぐにでも行つて、來客の顔を見たいとの好奇心も頻りに湧いて來たが、それも應揚を

缺ぐやうに思はれたので、二十分ほど待たせて置いてから、隆子は姿を見せた。

女はまだ二十四五で、小濱縮緬を果ねて着てゐて妊娠して居るのが先づその眼に映つた。

愕く程でもなかつたが、想像よりも、よい風采をして居るのが隆子に好い感じを與へた。「突然、お訪ね申しまして、お逢ひ下さるかとお心配して居りました。快よく御面接下さいまして有難うございます」と、女は叮嚀に挨拶した。

「いえ、實は近頃、少し身體の具合が悪うございますので、皆様にはなるべくお目に

かゝらないやうにして居るんでございますけれど——隆子はこんな事を言つた。「まあ、左様でございますか、それなのによくお目にかゝつて下さいまして、私嬉しうございます」

女は嬉しさうに恚う云つて、またお辭儀をしたが、やがて顔をあげた時に、その涼しい瞳には、涙が浮んで居た。

「私は只今、横濱の本牧に住つて居るものでございますが」
女が恚う云つた時に、隆子は、はつと思つた。兩手をついた左の手にさした指輪に、ア

レキサンダーが光つて居た。それに帶上なども、翡翠を飾つたもので、そのきらびやかな風采は、その素性を想像させるに充分であつた。

「本牧に住つて居る女——といふことで、どんな素性の女であるか、想像なすることが出来ませう。私は日本の女性として、淺間しい生活をして居る女でございます。米國の領事館に勤めて居るのですが、故國には歴乎とした妻があるのに、私を世話するやうになつたのでございます。もう一年近くになりますが、私を世話して居るといふことが、故國の妻にも知れて、他國に轉任の運動をしてゐるといふ事ですけれども、私が妊娠して居ますので、も暫く日本に居たいと主張して居るさうでございます。けれど私の胎内に居る子供は、果してその子であるかといふ事は疑問なのでございます。と申しますのは、私に一人の愛人がありまして、私は世話になつて居ながらも、その愛人を忘れることが出来なくなつて、今日まで度々逢つて居りました。私は今になつて、自分の罪業の深い事を知りましたが、此處まで行詰つてしまつては、どうする事も出来ません。私は死——といふ事も考へました。けれど、やがて生れ出づ子、それは誰を父として生れるか判りませんが、私の子

供といふ事には、少しも間違ひはありません。その自分の子に對しての愛着から、私はどんなに苦しんでも生きて行きたいと思つて居ります。今後、私は如何なる道を辿つたら、よろしうございませうか」

こんな相談は珍らしい事だったので、隆子は固喰つてしまつた。よく考へて見れば、この女の煩悶を解決することは、自分の問題を解決するといふ事にもなる。けれど、現在自分も迷つて居るのである。この女を明るい世界に導いてやるのが、自分には出来るであらうかとの懐疑心が起つて來た。

隆子は、ほつと苦しい息を洩して考へて居た。二人の女の間長い沈黙がつゞいた。隆子はやがて

「私もあなたと同じやうな煩悶に悩まされて、自分の身體を、どういふ風に處理したら好いか迷つて居て、まだ、その解決の方法が判らないのです」と云つたので、女は失望してしまつた。

「一日も早く悩みから脱れて、幸福な月日を送るやうにしなければならぬと思ひながら

私は此處數年間苦惱して居るのです。人間の力では、どうすることも出来ないと思ふやうになつた私は、無量無邊の慈悲の願望たる觀世音菩薩に取組らう、すべてをおまかせしようといふことにしたのです」

「觀世音菩薩とは、どんなお方なのですか」

「釋尊が説かれた信仰の理想なのです。女性でもなく男性でもなく、無量無邊の愛の象徴なのです。觀世音菩薩を念すれば、その功德によつてあらゆる煩惱から解脱することが出来るのです」

「私達も念すれば救はれるのでせうか」

「若有無量百千萬億衆生受諸苦惱聞是觀世音菩薩一心稱名觀世音菩薩即時觀其音聲皆得解脫」と觀音經にあるやうに、南無觀世音菩薩と唱ふるならば、諸々の苦悶から即時解脱すべし、釋迦牟尼佛は仰言いました。觀音を念すれば、七難を免かれ、三毒を離れ、二求を愆う説き出した隆子の態度は、高座にある時のやうな峻厳さを持つて居た。

「あなたは、その稱名を唱へて、救はれることが出来ましたか」

「さうです。救はれました。私は今ではその惱みから解脱することが出来ました」

「それを具體的に説明して下さいませんか」

「觀世音菩薩は、佛身を以つて得度すべきものには佛身を現はして法を説き、辟支佛の身をもつて得度すべきものには辟支佛の身を現はして法を説かれます。忍辱土に在る、凡ゆる身をもつて得度すべきものには、應作して法を説かれるのであります。故に、誰でも心に、觀世音菩薩を供養しなければなりません。觀世音菩薩摩訶薩は、怖畏急難の中に於て、能く無畏を施し給ふのであります。あなたが心から觀音を念すれば、何も畏るゝことではなく、あなたの靈眼は開いて、あなたの進み行く道は、示現せられるに違ひありません」

隆子は雄辯に説き出したが、女には、その話を理解することは出来なかつた。それだけでは、どうしても安心が出来なかつた。自分の行くべき道が、幸福な方面に向つて開展されさうに思へなかつた。

隆子も、自分の話を聞いて居るこの女が、この話が判りさうには思へなかつた。彼女は

恚うしたデリケートな問題の解決が、他人の意力に依つて出来ようとは、どうしても思へなかつた。

なり行きに任かせる、そして、その間に人間的行爲として、社會から非難せられない地位に立つて居れば、それで好いのだと思つて居た。

殊に、突然訪れて来た女のことである。眞實な悩みを告白して相談して居るのか、隆子にはこれまで、そんな相談をうけて、それが悪戯だつたこともあつたので、彼女は眞身になつて、相談に應ずるといふことは、その女の眞實を、もう少し確めた上でなければならぬと思つて居た。

『こんな話は、すぐに解決の方法を講じてくれといはれたつて、よい考へが浮んで來るものではありません。精神的な訓練と、時機とを待つより他にないのです。あせつては無理が生じて來ます。あなたの生活も見たいし精神生活の傾向も知りたいと思ひますし、又、あなたも私の精神生活を冷靜な眼で見居て下さるなら、何か會得せられるやうにならうとも思ひます』

隆子のこの言葉に、その女は喜んだ。

『さうして頂けばこの上の喜びはございません』

隆子は、洋妾の生活といふものを知りたいと思つた。自分とこの女との地位は變つて居るが、異國人の結婚生活の中には、何處かに共通な點があるかも知れない、自分の知らないことを發見することが出来るかも知れないと思はれたので、隆子はこの女に接近して行くために、自分から好意を示して、それから、いろ／＼打ち溶けて話をしたので、女も大さう喜んでその日は歸つて行つた。

第八詢

郷里の母から小使に送つて來た爲替を懐に入れると、松岡良三はすぐに郵便局に馳けつけた。がもう時間外だつたので、一旦、自分の下宿にかへらうとしたが、急に、お銀に逢ひたくなつたので、そのまま淺草の家に行つた。

帳場に座つて居た女將が、つか／＼と這入つて來た良三の姿を見ると、嫌な顔をしたの

で、女將の心の動搖を見ると、すぐに、その傍に行つて

「今日は、郷里の母から金が来たんだ。郵便局に行つたら、時間外で受取れなかつた。これだけあるんだ、預けて置くから、遊ばせてお呉れ」と云つた。女將は爲替を受取つたが、五十圓の金額だったので、急に笑顔をして

「ぢやあ。これあ預かつて置きますよ」と云つた。

「あゝ、好いとも、お銀ちゃんは居るかい」

「えゝ。今、お湯から歸つて来た處ですよ。お化粧して居るんでせう」と云つて二階の方を向いて「お銀ちゃん、良さんがいらしたよ」と呼ぶと、

「良さん……久し振りね。何時もの部屋で待つて頂戴」と、お銀の聲がした。

良三は、お銀の返事が、何時になく、自分を待ち焦れて居るやうな語調だったので、妙に嬉しさがこみ上げて来て、勝手知つた二階にとんくとあがつて行つた。

「お銀ちゃん、お化粧かい」

梯子段のとつっきの部屋が、此處の家の女達の化粧室になつて居たので、良三は突然、

襖を開けて恚う云つた。

「あら、良さん、こんな處をあけてはいけないわよ」

お銀とお光とが化粧してゐて、さも、あはてたやうに云つたが、その所作では、決して周章てて居るやうには見へなかつた。

肌抜きになつて、厚化粧して居たお銀は、良三の顔を見ると、にっこりと笑つて、

「彼方の部屋で温順しく待つて頂戴」と云つた。

良三は首肯いて、奥の六疊の座敷に行くと、女將が、自分でお茶を持つて来た。

「良さん、ほんとうに久し振りでしたわね。今日は、御馳走して頂戴な。お酒も召上るんでせう」

「あゝ、女將に任かせるよ。何か、うまいものを取寄せて下さいね」

「えゝ、何が好いでせう。良さんは何が一番お好き」

「何だつて好きだ」

「ぢやあ、良さんの好きさうな物を、私が見つくりひますわ、不平言つてはいけませんよ」

「あゝ」

良三は、現金な女將と永く話をするのが不快だったので、恚う云ふと、女將は

「お銀ちゃんが首つきりよ、足駄はいて」と言つて、良三の背を叩いて、階段を下りて行つた。

良三は、まがひの紫檀の茶舞臺にもたれて、敷島をふかして居ると、やがて、お化粧をすましたお銀が、部屋に這入つて來た。

「良さん、あんたが遊びに來た日には、お杜巳ちゃんが、大變、機嫌がわるいの、私にいろ／＼な皮肉を言つていぢめるのよ」

「どうしてなんだ」

「あんたに、惚れて居るのね」

「馬鹿、此方でごめんだ」

「と云つたつて、悪女の深情つてね、こんなことが聞えると、私は殺されちゃうわ。良さんも仕合せ者ね」

「お前は俺をからかつてるんだね。そんなら俺は怒るよ」

「からかつてるんぢやないの。本當なの、だから、私、あんたがいらしても、ちつとも嬉しくないわ、辛いんですもの」

「だつて、お杜巳ちゃんを、俺がどうしたといふんでもないんだから、かまはないぢやないか」

「そんなに單純に考へられないわ。良さん、今夜は、お酒召しあがるんでせう。ぢあね、

お杜巳ちゃんも呼んで頂戴な」

「俺は、嫌だ」

「ぢや、私、困るわ」

「そんなら呼ばう。俺は、あの女の顔を見るのも嫌ひなんだが」

「でも、お杜巳ちゃんは、それあ、あんなに執心なのよ。大べらに、良さんを、お銀ちゃんから奪ひ取つて見せると、豪語してゐるのよ」

「奪ひ取るつてははゝゝ」

良三は笑ひくづれた時に、とん／＼梯子段を上つて来る足音がした、その足音が、お杜巳の足音であることを知つて、お銀が目くばせしたので二人は黙つてしまつた。

「お銀ちゃん、はいつてもよくつて」

襖の外でお杜巳の聲がした。

「えゝどうぞ」

お銀は良三の顔を見てから恚う答へた。

「良さんが來てるんですつて、良さんは私の岡惚れなのよ。お顔を拜みに來たんだわ……ごめんなさい」

良三は少し横を向いて煙草を吸つて居た。

「良さん、しばらくね」

お杜巳は恚う云つて、良三の身軀に、すり寄りやうにして座つた。

「良さん、どうして横向いてるの、あたしが嫌ひなの」

「何を云つてるんだ。そんなことがあるもんか」

「ちやあ、笑顔位、見せたつて好いちやないの」

良三は

「くだらないことを云つてるよ」と苦笑をすると、お杜巳は

「播摩屋にそつくり、その苦々しい處が、私好きなの」と云つて顔を覗き込むやうにした。

お銀はお杜巳のさうした態度を、不愉快さうに見て居た。お杜巳はそれと知つて

「あら、お銀ちゃん、ごめんなさい。良さんは、あなたのお客様でしたわね」と、わざとらしく詫びるやうに云つた。

「いやよ、お杜巳ちゃん。あなたの好きな良さんが、私のお客さんだといふことを、私は誇りに思つて居るのよ」

「お銀ちゃんも、なか／＼うまくなつたわね」

「これも、あなたのお仕込みだわ」

こんなお話をして居る處に、酒肴が運ばれた。お杜巳は、良三を自分のお客のやうに、お銀はそつちのけにして、酒をのんでは、旺んにはしやいで居た。

お銀は、女將に呼ばれたので、やつと、二人きりになつて、良三はほつとした。
「ほんとうに騒々しい女だね。うはつ調子で、あの女の所作に、ちつとも、旋律といふものがなう」

「でも、なか／＼しつかりした女よ」

「さうかな。女の本性といふものは、なか／＼判らないもんだね」

「殊に、こんな處に居る女はね……」とお銀は怨う云つて、お酌をしながら「私、ひよつとしたら、二三日の内に、何處へか行つちまうのよ」と、しんみりとして云つた。
良三は愕いて

「何處へ行くんだら」

「そんなことは聞かないで頂戴」

「だつて、俺にだもの、云つたつて好いちやないか」

「こんな處にゐたつて、いつまでも、みじめな生活をしてゐなければならぬんですもの。どうせ、此處まで墮落すれば、何をしたつて同じだわ」

「それはさうだが、何か目的でもあるのかい」

「それあ、あつてよ。もつと華やかな生活がしたいんですの」

「華やかな生活？」

「ええ。あとで手紙をあげるわ」

「本當かい」

「逢はうと思へば、すぐ逢へる處に行くんですの」

「これぎりで逢へなければ、俺はどんなに淋しいか。きつと手紙をお呉れね。お銀ちゃんといふ女は、俺には最も強い印象を與へた女なんだ。俺は胸のお宮に、お銀ちゃんを祀つて置きたいとまで思つてるんだ」

「そんなに價値のある女でせうか」

「俺には、それだけの價値が認められる」

「有難う。こんなに墮落すれば、誰でも人間として好意を寄せて呉れるものはないのよ。そんな事を云つて呉れる人は、良さん、ほんとうにあんただけよ」

「ぢやあ、何處へ行つても、手紙をお呉れ。そして、時々、逢つてくれ」
「えー」——お銀はもう涙ぐんで居た。

「何日まで此處に居るの」

「長くてあと四五日」

「ぢやあ、も一度逢へるね」

良三は、お銀が何處へか行くと訊いて、妙に淋しくなつて來た。こんな處の女とは思へないほど、すなほな心をお銀はもつて居た。それが良三の心を捉へて居たのだつた。その夜は、お銀の處に泊つて、朝になつて歸つたが、それから三日目に、良三はお銀に

逢ひたいと思つて、淺草の家に行くと、居合はせたお杜巳が

「あら、良ちゃん、お話があるの、さあお上りなさい。私、待つて居たのよ」と云つて、良三を格子戸の中へ引摺り込んだ。

「お銀ちゃんは居なくなつたのよ」

二階の部屋に座るとすぐに、お杜巳は、手柄話をするやうな態度で恚う言つた。

「何處へ行つたんだ」

お杜巳の話振りでは、お銀が居なくなつた事情を、この家の者は知らないやうだつたので良三はとぼけた振りして恚う訊いた。

「あんた、知らないの」

「知らないから來たんぢやないか。何日から居なくなつたんだい」

「一昨日の夜」

「ぢやあ、俺が泊つて歸つた日の晩ぢやないか、そんな氣配はなかつたが、それで何處へ行つたか判らないのかい」

良三はお銀の告白によつて、何處へか行くといいふことは、この家の者の誰よりも早く知つて居たが、知らぬ振りして、もつといろ／＼な噂を聞き出さうと、お杜巳の迎向的な態度に自ら接近して行つた。

お杜巳は良三のさうした態度を、非常に喜びながら

「お風呂に行つて來ると出たまゝ、二時間も三時間も歸つて來ないので、女將さんは怪し

んで、お銀ちゃんの荷物を探したら、行李の中は空なの、何時持ち出したのか。あの女は着物は澤山もつて居たのよ。皆、愕いてしまったわ』

『それで借金でも踏み倒して行つたのかい』

『え、三百圓からの借金があるの。女将さんは愕いて探してゐるんですけど、今にその行方が判らないの』

『ふうむ。手まわしよくやつたものだね。そんな大膽なことの出来さうな女には見えなかつたが』

『どうして／＼なか／＼強か者ですからね、お銀ちゃんがゐなくなつて、御愁傷さま』

『馬鹿、そんな事を云うもんぢやないよ。お銀ちゃんがゐなくても、お杜巳ちゃんがゐるぢやないか、お杜巳さんさへよかつたら、俺はこれから時々遊びに来るよ』

良三はからかひ半分に云つた。

『ほんとう、嘘ぢやないでせうね。ぢや、今夜、遊んで行つて頂戴』

『今夜は駄目だ。持合せもなし、このまゝ歸るつもりだ』

『そんなことは心配しなくとも好いわ』

『騙つてくれるのかい』

『え、あなたのためなら、私は裸になつても好いわ』

お杜巳が執拗く引とめるので、良三はその夜、お杜巳の部屋に泊ることにしたが、寐てるながらも、別れたその日、行方を晦ますことがわかつてゐながら、それらしい氣配も見せず、四五日後といつて、自分にまで嘘を云つたお銀が憎らしかつた。

『何を考へてるの。お銀ちゃんのこと』

『だまされたのが口惜しいのさ』

『そんなに口惜しい。私、あなたにならだまされて見たいわ』

『本當にだますよ』

『後生だから、だましてやつて頂戴』

こんな對話を交はしながらも、良三はお銀の態度に對する不愉快の念が胸に一杯だつた。あの女は手紙を寄越すと云つたが、それも眞實とは思へなかつた——もう永久に逢へない

やうに思はれて涙ぐましくなつて來た。

お杜巳は改まつて

「良さん、私、あなたにお願いがあるのよ。あんた訊いて呉れて」

「どんな願の筋なんだ」

「實はね、私、世帯をもつて見たいの。そしたら、當り前の女のやうな生活をしたいの」

「好い相手でも見つかつたのかい」

「え、それで良さんにお願ひがあるの。私と一緒に世帯をもつて呉れないこと。私も一度は丸鬚を結つて見たいわ」

「俺にそんな腕はないよ、お前を食はせて行くなぞといふ」

「そんな心配なんかいらぬわ。あんたに物質的な苦勞はさせはしないことよ」

「有難う。だけれど、さうも行かないさ。俺だつて、この年になるまで親から勉強させて貰つたが、まだ一人口さへ働けないんだからね」

「そんな心配はさせないと云つてるぢやないの。私、世帯を持つて見たいの、何時までも

こんな生活をして居るのが嫌なんです。人間らしい生活をして見たいのよ」

お杜巳は熱心に口説くのであつた。良三はこんな處に遊びには來るが、こんな處の女と世帯を持たうといふ氣は少しもなかつた。けれど、女からあまりに執拗く口説かれると、そんな生活を體驗して置くことも、悪い事ではないやうに思はれた。

「でも、お前が想像してゐるやうな楽しい生活は出來ないかも知れないよ。その時になつたらお前は どうする」

「嫌になつたら別れてしまへば好いちやないの……」

「それあ、さうだ」

「ぢやあ、私の願ひを聞いて下さる。あゝ嬉しいわ。さうなれば、私はすぐに、その用意にとりかゝるわ」

「この家のことはどうするんだ」

「私は借金なんか一文もないのよ。少しあ貯へもあるわ」

お杜巳は、良三が思つたよりも容易く、自分の手に落ちて來たので、大さう喜んだ。

お杜巳はそれから十日目に、すべての跡仕末して、淺草の神吉町に、小さい二階一間下二間の家を、自分で探して借りてしまった。

「それあ、手ごろの家なの、二階は明るくて日當りもよし、あんたの勉強するにはこの上もない部屋だわ。これから一緒に行つて、新世帯の家を見て下さいな」

お杜巳は良三を訪ねて、無理矢理に引つ張り出して、神吉町の家を見せに連れて行つた。思つたよりも感じの好い部屋で、すぐ前はお寺の庭となつて居るので、市の真中にあつたが、靜かな部屋だつた。

「もう、明日の朝になれば、道具屋から、箆筒や茶箆筒や長火鉢や、その他、お臺所の道具を、全部持つて來ることになつてゐるのよ。夕方になつたらあんたも自分の荷物をまとめて引越していらつしやいな」

お杜巳はいそ／＼として怱う云つた。

良三は、あんな社會に居た女だから、かなり荒んだ女に違ひないと思つて居たのに反して、お杜巳が純な娘らしさがあることを知つて、これまで、お杜巳に對して抱いて居た、

不快な印象は何時のまにか、消えて行つた。

翌日の夕方、良三は机と本箱、夜具の一包みと、行李二個とを、俥に積んで、神吉町の家に行くと、もう、家の中は片付いて、長火鉢には火をおこして、銅壺の湯が沸つて居た。

「一人者にしちや、道具が多いのね……でもあんまり遅いんで、だまされたのかと思つて居たわ」

怱う云ひながらも、お杜巳はいそ／＼として、良三の荷物を二階に運んだりした。

「馴れない髪を結つたものだから、鬘がそこ／＼にぶつつかつて困つちまうわ」

怱う云はれて、良三はお杜巳が、もう丸鬘を結つて居ることにはじめて氣がついた。

「よく似合うね、その方が、すつと上品に見えて好いよ」

「さう。嬉しいわ。髪結さんが、好いおくしだとほめてくれたわ」

お杜巳は胸の底から、こみ上げて來る嬉しさを押へきれないやうな喜びを見せて、姿見に自分の姿を寫して見たりした。

「向三軒兩隣りに、引越し蕎麥も配つちやつたのよ。家主さんには、おかめ三つ……これ

から、近所とのつき合ひもうるさくなるわ。でも、恚うして二人で住むことが出来れば、私何も残り惜しい事はないわ」

その夜は、お杜巳が氣をきかして拵へて呉れた、八たんのかいまきを着込んで、長火鉢をはさんで、酒をのんだ。良三は酒をのみながらも、恚うして居るのが、どうしても、自分の家、自分達の生活とは思へないやうだつた。遊びに来てゐる時のやうな氣がしてならなかつた。

三日目に、お杜巳と良三とは、初めての喧嘩をした。その原因は、二階の窓から眼の下に見える、お寺に十七八の美しい娘がゐるといふことを話したのが、お杜巳の氣に入らなかつたのだつた。

「あんたの心持を、私はちやんと知つてるので、そのことが一番心配なのよ。後生だから浮氣な心は起さないで下れよ」

お杜巳は自分の嫉妬から遂ひに喧嘩になつて、良三は憤り出した。が惚れたといふ弱味をもつて居るので、果ては涙ぐみながらこんなことを云ふのだつた。

同棲の日が累つて行くに従つて、嫉妬が原因となつて幾度も、二人は激しい争論をした。良三はむきになつて憤り出して、お杜巳を引ずり倒して、丸鬚をつかんで、撲つたりした。お杜巳は泣いて居たが、喧嘩が一段落すむと、あとで、鏡臺に向つて、亂れた髪をなほしたりして居るのが、妙に良三に、あんな手荒いことをしなければよかつたといふ悔悟を齎らしたりした。

その月の末になつて、お杜巳は良三に何の相談もせず、すべての支拂を済した。米屋の拂ひは何でもなかつたが、酒代の拂ひはかなり嵩んで居た。それに肉屋、洋食屋の拂ひも相當にあつた。新聞代、町會の會費など、こま／＼したものも合計するとかなりの額になつて居たらしかつた。良三も氣の毒になつて

「拂ひには大丈夫かい。足りなければ、俺にも少し持合はせがあるよ」と云つて、十圓札を五枚出したが、お杜巳はそれを押しやつて

「そんな心配なんかいらぬわ。私は自分の腕一つでやつて行ける自信があつたから、こんな事を思ひ出したのよ。お心はうれしいけれど、それでは私の心がすまないから、これ

はおさめて置いて下さい』と云つて、どうしても受取らなかつた。

良三が床に入つてから、お杜巳は長火鉢に側に座つて、遅くまで金銭支出の計算をして居たが、その習日からは、かなりすべてにしまつた生計振りであつた。

『あんな處の女に、こんな頭腦の働きもあるか』と思ふと、良三は次第／＼に自分の心がお杜巳に引ずられて行くやうに思はれた。どんなに考へても『生涯を共にする女ではない』といふ決心があるだけに、それを不安に思ふやうになつた。

良三は、お杜巳と一緒に暮すやうになつてから、あまり外出もせず、外出するにしても、コーヒーを呑んだり、洋食屋でビールをのんだりする金は、何時もお杜巳が支拂ふので、小使もあまりかゝらないので、月半ばになつても、郷里から送金して來た金が、それほど缺げもせず、紙入れの中に残つて居た。

『どうだ、二長町が面白いといふから、行つて見ようぢやないか、俺にも小使がまだ澤山あるよ』

良三が恚う誘ふと、お杜巳は

『なるべく無駄使ひはしない方が好いわよ——』と云つて、あまり進んだ心持も見せないで、良三はあんな過去を持つて居ながらも世話女房型に出來上つて居るお杜巳の人格に對して、ある敬虔の念を抱くやうになつた。

同棲して二月目の支拂ひは、お杜巳にはかなりこたへたらしかつた。良三は氣の毒になつて、何か云はうと思つても、自我の強いお杜巳が、自分のいふことを聞き容れさうにも思へないので放つて置いた。いよ／＼苦しくなつて、金の工面にも困るやうになつたらば二人が同棲するだけの辛棒をもつて居る迄は、自分も物質な責任をもつ覺悟はして居た。

けれど、お杜巳は決して、金のことで、相談をもつて來なかつた。良三の觀察では、もう、昨日、お杜巳の懷中には、金もなかつたらしいが、お杜巳は小さい包物を抱いて『ちよつと其處まで』と云つて、ものの三十分も経つて歸つて來ると、すぐ跡から

『お待遠さま』と云つて、酒屋が酒をもつて來た、と五分ほどして、角の肴屋から、刺身を二人前持つて來た。

『お前、そんなことして好いのかい』

『どうして』——お杜巳は強ひて笑顔を見せた。

『だって、お金なんか、もうないんだらう』

『この頃、何の御馳走もないから、久し振りにと思つて買つて来たわ』

お杜巳は淋しい笑顔を見せた。お杜巳のお酌で酒をのんで居たが、良三は世帯苦勞して居るお杜巳の心の底を思ふと哀れになつて来た。

『好きな亭主と、世帯の苦勞するといふのはほんとうに楽しみなものね』

お杜巳も二三杯のんだが、もう、顔を赧くして居た。

『お前は自分で金の工面をすと言つて居けれど、こんな生活が何時までつゞけられる見込みなんだい』

『やれる處までやつて行くわ』

『あんまり無理はしないが好いよ』

『え、有難う』

お杜巳は涙ぐんだ。

月末がまたせまつて来た。良三は、その頃、自分が關係して居る雑誌のことで、毎日のやうに外出して居た。朝の十時頃外出して、歸宅するのは、何日も夜の十二時近くになつて居た。お杜巳は寐ないで、良三の歸るのを待つて居たが——ある夜、良三は、八時頃に歸つて来ると、何時も迎ひに出るお杜巳の姿が見えなかつた。

『何處へ行つたんだらう』

不快になつた良三は、火鉢の前に長くなつて、敷島をぶか／＼ふかして居たが、十時になると、から／＼と下駄の音させて、お杜巳が歸つて来た。その手には、新聞紙に包んだ小さいものをもつて居た。

『今頃まで、何處へ行つてたんだ』

良三の聲は、妙にいら／＼して居た。

『え、ちよつと用事があつて』と、お杜巳は思ひがけなく良三が歸つて来て居たので、周章の色を見せたが、こんなことを云つて、新聞紙包みを開いた。お杜巳は牛肉を買つて来たのだつた。

「御飯はまだでせう」

「うむ、御馳走になつて来た」

「私、まだなのよ。ちや、お酒をとつて來ませうか。あなたはお酒をおのみなさい。私は御飯を頂くわ」

恚う云つて、お杜巳は立上つた。

「好いよ。お酒なんか、のみたくない」

「どうして……」

「酒なんか氣持よくのまなければ、うまくないんだ。金の工面に苦勞してゐるお前に酒をのませてもらつたつて、ちつともうまくはないよ」

「でせうけれど、私は苦勞してこさへたお錢で買ったお酒を喜んで飲んで下さると、その苦勞も忘れてしまふわ。恚うして世帯の苦勞するのが、私にはたまらなく嬉しいんだわ」

「でも、もう月末が来るよ。今月の拂ひはどうするんだ」

「そんなことは、あなたに心配をかけないと言つてるぢやないの」

「でも、恚うして居れば、そんなことは云つて居れないぢやないか。俺にも少しは持合せがあるから、お前にやつて置かうか」

「そんなお錢があつたら、着物をこさへたらどう。私縫つてあげるわ」

「お前に着物なんか縫へるのか」

「その位のことでは出來てよ」

お杜巳は快さうに笑つた。

お杜巳はどうして工面したのか、その月末の支拂も済ましたが、それから、數日の後だつた。良三は午後から、雑誌のことで、友人を訪ねたが、あまり面白くない事があつたので、夕方自分の家に歸つた時に、お杜巳の姿は見えなかつた。

氣がいら／＼して居る處に、お杜巳の姿が見えないので、良三の心はいよ／＼けわしくなつて行つた。

九時になつても十時が打つてもお杜巳はまだ歸らなかつた。寐てしまはうと思つたけれども、寐れさうにないので、ほつねんと起きて居たが、十二時頃になつて、お杜巳は酒に

酔つて歸つて来た。

今夜だけは、お杜巳が居ないのが、妙に淋しくて、待つて居たので、酔つた姿を見ると、良三はむら／＼として来た。かなり酒をのんだらしく、足もとも危うく、ひよろ／＼として長火鉢の前に座つた時に、激しい憎悪を感じた良三は、何にも云はずに、お杜巳の頬をしたたかに撲りつけた。

お杜巳はそれが突然だつたので、横に倒れようとしたが、黙つて充血した眼で、良三の顔を見上げた時に良三は又嚇つとなつて

「何んだ、そのさまは」と吐鳴つた。

「酒をのんで来たのが悪るいの」

「當り前さ、そんなに酔うほど、のむ奴があるものか」

「悪るかつたら許して頂戴」

お杜巳はすなほに疊の上に手をついた。お杜巳は、良三の心持が何だか頼りなかつた、自分に對してどんな感情を抱いてゐるのだらう、別に自分の行爲に對して嬉しいやうな感

情も見せず、それとて、恚うした生活をして居るのが嫌でもないらしい素振りを見ると、惚れた女の弱味には、それが何だか物足りなかつた。もつと、熱烈な生活の緊張さがほしかつた。

通く歸つて来ても、嫉妬を起さず、たゞ表面上、同棲して居るに過ぎないと思ふと、自分の苦勞も、無意義であるやうな懷疑に襲はれて居たのだつた。けれど、今夜、良三が激昂して、自分を撲つたことが、たまらなく嬉しかつた。

お杜巳が詫びて居るのをじつと見てゐた良三は、あんまり酒のめない女だけに、今夜酒をのんで来たことが、何だかいら／＼した自分の心を、もつといらだたせて行くので、その心はなか／＼鎮まらなかつた。良三は悪魔のやうになつて、お杜巳を蹴つたり撲つたりしたが、あとで急に淋しくなつて、泣き伏して居るお杜巳にかまはず、二階に上つて行つた。

そして、自分で布団を敷いて、頭から冠つて寐たが、やがて、お杜巳は何時ものやうに、水差と、コップを持つて来て、その枕もとに置いて、そつと階下に行つた。

お杜巳は晝過ぎになると、何時も外出した——良三は別にその行方を聞きもしなかつたが、お杜巳は夜九時より早く歸つて来たことはなかつた。

お杜巳は元氣よく歸つて来たが、何處かに疲労した跡が見えて居た。良三はお杜巳が何處へ出かけるのか、疑問を抱くやうになつた。

お杜巳は、自分の愛の生活を、つゞけて行くためには金を得なければならぬ。繊弱な彼女は、これといふ職業もないので、淺ましい生活とは思ひながらも、淺草の家に行つてお客を取つて居るのではないかと思つて居た。

良三は、そんなことを思ふたびに、お杜巳が、愛の生活に對して、どれだけの生命力を注いで居るかと思ふと、慘らしさも湧いて来たが、永久的ではなくとも、恚うした生活をして居ると、お杜巳がそんな生活をして居ることは、彼にとつては、堪えられない苦痛であつた。

良三は、お杜巳がどんなことをして居るのか、確めて見たいと思つて、お杜巳が出かけてから三時間ばかりして、黄昏頃になつてから、心當りの方へぶらりと出かけた。

良三は帽子を眞深く冠り人混みの中にまじつて、お杜巳が居た例の「淺草の家」の附近を歩いて居た。

久し振りに、この境域へ足を踏み入れたのだが、冷靜に考へて見ると、これ等多くの人々に交つて、嘗つては自分もこの境域に出没し、耽溺して居たかと思ふと、永遠に拭ひとれない汚點に染められたやうな氣がして、自己を卑下する氣持が強く起つて来た。

「現實の自分は決して肉に飢えて居るのではないのだ」と思ふと、それほどでもない誇りを強く感じながらも、一軒一軒格子戸から、首を突込んで居たが、例の家まで来ると、突然、横合ひの板の間から、巨人の手ともいつたやうな、かなり威壓的な手が、ぐいと出て、良三を引つぱりあげた。

ちらと見ると、それが、お杜巳だつたので、かねてから覺悟して居たことではあつたが彼は愕然とした。

「随分、失禮だわ。家の中に遣入つてもそんなに帽子を冠つゐるなんて、早くお脱ぎなさいよ」と云つて、女は良三の帽子を引奪くるやうにしたが、それと同時に

「あつ」と悲鳴をあげて、其處へ泣き伏した。

「済みません〜」と云つて、お杜已は何時までも顔をあげなかつた。

良三は黙つて居たが、やがて

「俺は歸るよ」と云つて立ち上つた。お杜已は不安さうに

「あなた、家にかへつて居て頂戴ね。私もすぐ歸りますから」と云つて、良三の手をしっかりと握つた。良三はその手を振放して

「お前はこんなことまでしても、俺と一緒に居たいのかい。けれど、それは俺には黙視するに忍びないことだ」

「そんなことは云はなうで下せよ」

「俺は、正しい道を辿つて行きたいと思つて居る。俺はこのまゝ、何處へか、姿をかくしたいのだ」

「そんな事、嫌だわ〜」

「俺はこれ以上に、地獄の生活をしたくないのだ」

「私が悪るいんです。宥して下さい」

「宥すとか宥さぬとか、そんな問題ではないのだ。俺の本當の心持が、承知しないのだ」

「何も仰言らないで下さい。私が悪るいんです。それに就いて、私はあなたに、お話ししたいことがあるんですから、うちへ歸つて待つて居て下さい。私もすぐ歸りますから」

お杜已は手を合はせて拜むやうにして、慙う云つた。

良三は軽く首肯してその家を出た。良三は家に歸る途中、しみじみと自分の生活といふものを考へて見た。

こんな事までして、愛慾生活のために、自己を犠牲にして居る女の心持が、彼にはなかなか理解せられなかつた。けれど、彼の胸に湧いて來た。正しい批判は、お杜已との生活から脱れるといふ事であつた。さうすれば、お杜已は心の苛責を感じることもなく生活をつとけて行けると思はれた。が、それに反して、自分は果して、正しい道を辿つて行けるかは、疑問だつた。

自分の生活は、如何なる方面に開展して行つたらよいか、その解決に悩まされながら、

とぼ／＼と歩いて居るうちに、何處をどう歩いて来たのか、良三は神吉町の家とはまるで反対な、淺草橋のほとりを歩いて居た。

お杜巳は、良三が歸ると約半時間ばかりして、歸路についた。途中で、良三の好きな羊かんを買つて歸ると、玄關に下駄が見えなかつた。どうしたのかと思つて、茶の間に馳けのぼつたが、其處にも良三の姿は見えなかつた。お杜巳はいら／＼しさうにして、二階にあがつて見たが、良三は居ないので、彼女はわつとその場に泣き伏した。

お杜巳はやがて、階下に降りて来て、長火鉢の前に座つて、何時までも泣いて居た。もうこの家に歸つて来ないのだらうか？ 永久に自分から去つたのかと思ふと、涙はとめどもなくこぼれるのだつた。

ふと眼がさめると、お杜巳は火鉢の傍で寢込んで居たのだつた。時計を見ると、もう夜半の二時過ぎだつた。今夜は歸つて来ないのだと思うと、玄關の格子戸の錠を下して布圍をしいて、横になつたが、また一ときは眼が冴えて眠れなかつた。

朝、眼がさめた時には、もう朝日が高く上つて居た。寐不足の赤い眼をして、寐巻のま

ま様の戸を繰つて、お杜巳はまた寐床の中にもぐり込んだ。

そして、煙草盆を枕許に引きよせて、寐ながら、煙草を吸つて居た。

『このまゝになつてしまつたら、自分はどうなるだらう』

お杜巳はそんなことを考へて居た。永遠に光明のない國から國へと辿つて行く自分の悲惨な姿が眼の前に幻のやうに現はれた。

『昨夜、何處へ泊つたのだらう』——こんなことを考へると、嫉妬心が起つて来て、一と思ひに良三を刺殺してしまつて、自分も同じ刃で死んでしまつたらとも思つた。

枕時計が八時を報じたので、お杜巳は起き上つた。胸が一杯になつて、飯もたべたくなかつたので、茶をいれようとお杜巳は火をおこしながら、座敷を掃除して居る處に、良三はひよつこり歸つて来た。

良三は火鉢の前に黙つて座つた時に、猫板の上に、自分の好物の羊かんがあるのを見て淋しい笑を洩した。

『何處へ泊つていらしたの』——お杜巳は先刻から、良三が歸つて来たなら、そんなことを

云ふまいと思つて居ながら、ついこんなことを云つてしまつた。

「俺を詰問する資格が、お前にはあるのか」

恚う云はれてお杜巳は黙つてしまつた。

「羊かんがあるね。御馳走になるよ」と云つて良三は手を出した。

「え、どうぞ。あなたにあげようと思つて、昨夜買つて来たのよ」とお杜巳は淋しい笑を見せて「濃い茶を入れませうか」と云つた。

お杜巳は良三が歸つて来たなら、自分の云ひ分だけ云つてやらうと思つて居たが、良三の顔を見ると、もう何んにも云へなかつた。

「僕の知つてる女を、この家に置いてやつても好まか」

良三は突然恚う云つて、どんな返事をするかと、お杜巳の顔を見た。お杜巳は悸つとして、すぐ返事をしなかつた。

「この上、人を置いて暮して行けるでせうか」

「生活費はお互の負擔さ」

「ちやあ、私が憧れてゐた、世帯の苦勞なんてえものは、なくなくなるのね」

「世帯の苦勞なんて、つまらないぢやないか——何の價値もないことだ」

「さう。あなたが置いてやりたいのなら、私はかまひませんわ」

良三の顔を讀んだお杜巳は、仕方なく、恚う云つて、そつと袖で涙を拭いた。

どんな女が来たつて、敵として戦う場合には、自に勝算があるやうに思はれた。けれど、

お杜巳はさうした争闘に飽きて居た。獨占して、戀の享樂に耽りたかつた。

「快く承諾してくれて有難う」

良三は思つたよりも容易く承知したので、ほつと軽い息をした。

午後になつて外出した良三が、夜になつて連れて来た女は、思ひがけないお銀だつたので、お杜巳は吃愕りしてしまつた。お杜巳が昂奮してぶる／＼震へて居るのに反して、お銀はいやに落付いた態度で

「今日から、いろ／＼お世話になります」と言つたが、お杜巳はそれに対して返事さへしなかつた。

他の女ならともかくお銀を連れて来る良三の態度が心憎くてならなかつた。

戀の争鬭の渦巻の中に置かれたお杜已は近頃にならない緊張さを見せるやうになつた。彼女は良三とお銀との行動を一つも見のがすまいとした。

お杜已はこれまで氣輕るに買物にも出かけたが、お銀が来てからは、良三とお銀とを残して家をあけるやうなことはしなかつた。そして、お銀に對して、何かにつけて、自分に優越權があることを、殊更に見せやうとした。けれど、さうした中にも、お杜已には、お銀がいつ自分の手から良三を奪つて行くか、それが不安でならなかつた。

その夜、お杜已はよんどころない用事があつて外出しなければならなかつた。幾度か躊躇したけれども、金策のことでもあつたから、お杜已は不安を感じながらも、自分の家を出た。早く用事を済して歸らうと思つて出かけたのだが、訪ねたお慎といふ婆さんが外出してゐたので、歸宅するのを待つて、用件をすませ、自分の家にかへつた時は、もう十一時を過ぎて居た。

そつと格子戸を開けて自分の家に這入つたが、下の茶の間に、お銀の姿が見えなかつた。

と云つて、二人とも外出したらしい形跡もないので、そつと梯子段をのぼつて良三の部屋に行くと、二人は枕をならべて、すやくと眠つて居た。

お杜已は激しい嫉妬を感じて、枕もとに立つたまゝ、咳拂ひをすると、お銀はびつくりして眼をさました。枕もとにお杜已が立つてゐるので、愕然りして立上つた。

「何つて、圖々しい女だらう」

お杜已は自分の優越を見せるやうに恚う云つた。そして、良三を揺り起さうとする間にお銀はこそくと下の部屋に行つた。良三は狸寐入りして、なか／＼眼をさまさなかつた。

お杜已は、お銀に對して、言ひ分があると、よほど、取控いてやらうと思つたけれど、よく考へて見れば、お銀のお客に、自分が手を出したのだから、其處を突込まれる弱點もあつたので、言葉を控えて居た。

お銀はその翌朝から、毎日のやうに外出して、遅くなつて歸つて來た。時には泊つて來ることもあつた。

お杜巳は、寐る時に寝苦しいからと云つて、よく似合つた丸髷も三四度結つたぎり、それから結はないで居たが、お銀が来てからは、二日置きに、髮結さんに通つた。そして丸髷を結つて來ては、お銀に見せびらかすやうにして居た。

三人で夕飯を食べる時などに、お杜巳は誇らかに、髮結さんが好いおくしだといつて、讚めたなどと語つたりした。

二日ばかり歸つて來なかつたお銀は、お杜巳が錢湯から戻つて來ると、歸つて來て居た。お杜巳は挨拶もせず、鏡臺に向つて、鬚を梳いて居た。

「お杜巳さん、いろいろお世話になりましたが、明日から横濱に行くことになりました」とお銀は云つた。

「さう、横濱へ、誰か知つてる人があるの、それとも何か仕事でも見つかつて」

「ええ、親類の者の世話で、外國商館に勤めることになつたのよ」

「さう。たんとお錢がとれるんでせう」

「ええ。でも小使だけだわ」

「以前のやうな生活をしないだけ、どれだけ立派な生活か知れやしないわ」

「本當に、何時までも、あんな生活をしてゐては、荒んで行くばかりですからね」

「お互に、明るい生活をして行きたいわね。人間なみな生活をして行きたいわ」

その時、良三は

「ぢやお銀ちゃん、横濱に行つちまうの」

「ええ、東京から通うのも大變でせう。幸ひに本牧に知人が居て、二階を貸してくれると

いふんですの」

「それあ、好いね、でも横濱なら時々逢へるね」

「お隣りへ行くやうなものよ」

お銀が今夜限りで、この家を去ると思ふとお杜巳は、ほつと安堵の胸を撫で下した。良三を自分のものとする事が出来る、戀の闘争から脱れる事が出来ると思ふと、お杜巳は珍らしく明るい氣持になつて、お銀にもいろいろ話をしかけたりした。

横濱に行つたお銀から二週間ばかり後に手紙が来た。その時に、恰度、お杜巳は買物に行つて居て留守だったので、良三はほつとして、二階に行つて封を切つて讀んだ。

この次の火曜日に横濱に遊びに来て呉れ。十時迄に櫻木町に迎ひに行くからと書いてあつたので、指定された日に、お杜巳には友人の處に行つて來るとの口實で、うまくごまかして、良三は横濱に行くと、お銀はもう姿を見せて、待つて居た。

「よく來たわね」と云つて、近づいて來た。お銀の風采を、よく見て、良三は僅かな間に、立派な風采をして居るのに愕いた。

「すぐに、うちまでいらつしやいな」と云つて、お銀はタクシーを呼んだ。二十分もして自動車はある和洋折衷の立派な家の前に止まつた。

「此處が私の家よ」と、お銀は驚異の眼を開いて居る良三に、笑ひながら云つた。

女中が出て來て、良三を西洋間の應接室に案内した。

「私がどんな事をして居るか、判つたでせうね」と、お銀が良三の肩を叩いた時に、良三は軽く首肯いた。

「私達のやうな女の行く道は、この道より他にない事よ。徹底するまで、墮落すれば、氣持が好いわ」

其處へ、女中がコーヒーを入れて來た。

「三時になれば主人が歸つて來るの、それまで悠つくりしてゐらつしや」

お銀は恚う云つて

「私達の寐室に案内しませう」と、先立つて扉を開けて廊下に出て、奥の西洋室に導いた。寐室といふのは、十畳ばかりで、ダブルベットが置かれてあつた。壁には、裸體畫がいくつも額にはめて飾つてあつた。

「私達はこのベットの中で、毎朝、コーヒーを呑むのよ」

お銀は恚う云つて、傍の長椅子に腰を下して居る良三の膝にもたれかゝつて來た。良三は物珍さしさうに、部屋の周圍を、ぐる／＼と見廻はして居た。

お銀はつと立つて、部屋の片隅に置かれてある戸棚から、ベルモット、ベバーミントなどの洋酒を取り出して、小さいコップに注いで良三にすゝめた。

『私達は寐る前に、こんなお酒をのむのよ』
と言つたりした。

『もうそんな話はよして呉れ、俺の心臓は破裂しさうだから』と良三は呻るやうに云つた。
『でも、あなたとお杜巳さんのやうな生活が出来たら、私は何時にでも、こんな生活は
やめてしまふわ』

『俺達の生活が立派なものか。この生活と對照したならば、太陽に對する星の光りのやうな
ものだ』

『あなたはそんな考へをもつてゐらつしやるの。まだお坊ちゃんね。どんな貧乏しても
好いから、好きな人と世帯の苦勞をして見たいわ。お杜巳さんのやうに、丸髷も結つて見
たいわ』

『そんな話はよして呉れ、俺は侮辱されてるとしか思へないんだから』

良三がこんなことを云つたので、お銀はそれつきり口をつぐんで居たが、良三が何に衝
動を感じて居るのか、懊惱して居るのを見ると、彼女は微笑しながら、傍の書棚から一冊

の洋書を取り出して

『寐る前にこんな本を見ろと云うのよ』と言つて、お銀は獨逸語の書物を見せた。何が書い
てあるのか判らなかつたけれど、誰でも魅惑させられる内容を持つ書物であつた。

良三はお銀を逢曳するために、一週に一度はお杜巳の眼を盗んで横濱に行つた。淺草の
家に居た時のお銀とは思へない位に、明るい華やかな女となつて居るのが、良三の心を魅
了した。

『あなたの商賣は、何處へ住んで居たつて同じでせう。一さうのこと、横濱へ來てはどう』
お銀はある日恁う云つて、頻りに横濱に來ることを懇願した。お銀と逢つて、歸ると暗
い顔して居るお杜巳が、良三にはいとしくなつて來るので、お杜巳から永久に去りたい
と思ふ心が日に／＼強くなつて行つた。

『何處か、この近所に二階をかりてさへ居れば、お互に逢ひたいと思ふ時には、割合に自
由に逢へるわ』

「でも、お杜巳がそれと知つたら、どんなに大騒ぎをするか知れないよ」

「あなたはそれが恐いの」

「恐かないさ……あんな生活をいつまでも、つゞけて行くことは、俺にはとても出来ない事だからね」

「何時までもあゝした生活をしてるれば、其處に人情といふものが湧いて来て、なか／＼別れられなくなつて来るものよ。別れるなら今だわ」

「それもさうだ。ぢやあ、俺も近日中に、横濱に引越して来よう」

「私も淋しいから、早くいらつしやいな。私、宿を探して置いてよ」

お銀はのり氣になつて来るので、良三もつい約束をしてしまった。けれど、お杜巳の監視の中から逃げ出すことは、生命がけのことのやうに思はれた。

自分に對して、あれほどまで、つくして呉れる女を、捨てるといふことは悪行爲のやうで、幾度か躊躇させられたが、自分の生活といふものを基調として考へると、いつかはお杜巳とも別れなければならぬ運命が到来するのであるから、だん／＼深味に陥らないやう

に別離を決行したが、お互のためであるやうに思はれた。

愈々決心して、行方を晦まさうと覺悟したその日は、朝飯を喰べる時に、お杜巳は金策のため出かけると言つて居た。良三はあつらへ向きのことなので、心のうちでは非常に喜んだが、自分の計劃を看破せられまいと、媚びるやうな態度を示した。そして、お杜巳が出かける時には、珍らしく接吻までしたので、近頃になく氣嫌の好いのが、お杜巳にとっては薄氣味悪く感ぜられたが、良三にさうした計企があらうとまで洞察し得ないお杜巳は心に満足して出かけて行つた。

お杜巳は、自分が淺草の家に流れ込む時に世話になつたお時婆さんに、金策を頼んでゐた處、金は何時でも用立てるからとの返事が来たので、返却すべきあてのない金だけれど、借りれる時には借りて置いたが好いと思つたので、出かけたのだつた。

厩橋の手前で、左の横丁を一丁ほども行くと、角に駄菓子屋があつて、すぐその隣りがお時婆さんの家だといふことは、三年前に行つたばかりだったが、お杜巳はそれを覚えてゐるので、すぐ判つた。

「話にきけば、お前さんは世帯をもつてるさうだが、何たつて、そんな窮病な考へを持つやうになつたんだい」

お杜巳の顔を見ると、お時婆さんは、すぐ恚う云つた。

「好きな男があつたので、つい世帯をもつて見たいと思つただけよ。道樂氣ですわね」

お杜巳は世帯を維持するためには本氣になつて苦勞して居るのだが、お時婆さんから金を借りるには、こんな嘘も云はなければならなかつた。

「面白くもねえ道樂氣を起したものだね。あれだけの胸前のあるお杜巳さんが、どうしてそんな氣になつたかと思つてゐたのさ。今度逢つたら意見してやらうと思つてゐた處なんだよ」

「地方の金持の若旦那なだけで、道樂の結果、今では金も送つて來ず、自分の働きといふのも、月に二十圓か三十圓しかないんです。たまに、おふくろから金は送つて來るんですが、それは、世帯の足しにはさせないんです。自分の道樂氣なだから、金のことなら自分で工面したいと思つてゐるんですよ。少し位の借金したつて、三百や五百の金を借り

るにしても、つぶしはきゝさうですからね」

「それあ、お杜巳さんのことから、無證文で、私だつて、三百や五百はかしてやるよ。で、今日はどの位、ほしいんだ」

「さうね。澤山かりては、かへす時に困るんですから、當分の雜用に、三百圓ばかり貸して下さいな。そのうち、道樂もやめれば、昔のやうに稼ぐわ」

「さうさね。何時までも、そんな生活をしてゐたつてつまらない。そのうち、早く足を洗つたが好いよ」

お時婆さんは、こんなことを云ひながら、筆筒の抽斗から、成田山に詣つて貰つて來た爵金の財布を出して、十圓札束で三百圓貸して呉れたので、お杜巳は挨拶もそこ〜にお禮を述べて、お時婆さんの家を出た。

お杜巳は、近頃、良三が、ベルモットを飲みたいとか、ペパアミントを飲みたいなどと云つて居たので、金が手に入ると、洋酒屋で一瓶づゝ買つて、自分の家にかへつて來たのは三時過ぎだつた。

お杜已は何気なしに、自分の家にはいると部屋の中が、何だか取亂してあるのに、はつと胸をつかれた。急いで、三階に駆け上がると、良三の唯一の財産たる本箱も机も、そのままになつて居たが、目ぼしい書物が見えなかつた。押入をあけて見ると、トランクが一つと、布團などが見えなかつたので、お杜已は轉倒せんばかりに驚いた。

がつかりして、机の上をよく見ると、残片に何か書いてあつた。拾ひ取つて讀むと、萬年筆で——自分は慙うした生活を何時までもつゞけてゐるに忍びない。自分は新しい世界に進んで行かなければならぬ。自分は放浪の旅に出るつもりだ。再び逢ふ日まで、無事に暮して呉れ——と書いてあるのを見て、お杜已は急に恐しくなつて、疊にうち伏して何時までも泣いて居た。いろ／＼考へて見ると、お杜已には、思ひ當る事が多かつた。

『きつと、横濱に行つたに違ひない。お銀と一緒に暮す積りなのだ』
慙う思ふと、お杜已は赫つとなつて、その残片を引裂いて

『別れると云つたつて別れるものか、捨てるなら捨てて見ろ、逃げるなら逃げて見ろ、何處までも追つかけてやるから』——彼女は夜叉のやうな凄い笑を洩した。

良三は荷物を停車場に残して、自分は電車で、雲井町の宿屋に行つたが、お銀は自分で探した宿で、一時間も前から来て待つて居ると言つて居た。

その宿屋は、伊勢崎町の芝居小屋に通う役者達の定宿になつて居た。朝九時頃になると二階の十疊二間を占有して居る喜樂座の大部屋の連中が、本讀みや立廻りなどして賑かだか、正午過ぎになると、何れも芝居小屋に行つてしまうので、閑然りとして居た。

良三の部屋は、六疊一間で、隣りの部屋には、同じ一座の子役とその附添ひの婆さんと二人の女優が泊つて居たが、晝間でもじつとして居ると、妙に陰鬱さが、犇々と身に迫つて来るやうな部屋だつた。

壁などにも處々に黒い斑点がついて居て、床間にも、名も知れぬ畫家の筆になつた山水畫がかけてあつたが、それも煤ぼけてしまつて居て、部屋の陰鬱さを、より以上に陰鬱にして居た。

その日正午になると、良三は本牧のお銀の家に遊びに行つた。そして二人は連れ立つて八景園に散歩に行つたりした。夕方になつて、お銀に別れた良三は、このまゝ宿屋にかへ

るのもあまり心が進まなかつたので、伊勢崎町に行き、オデオン座で活動を見て、十時頃にかへつて来ると、やがて、芝居も閉場たと見えて役者連中が歸つて来て居た。と、突然に

「畜生、もう勘辨ならねえ」と怒鳴る聲がしたかと思ふと、わつと悲鳴をあげる女の聲が聞えた、それと同時に、部屋の中は騒々しくなつて来た。

「醫者だ、醫者を呼んで来い」

「町田をつかまへろ、暴れさしちやいけねえ」

「放せ〜。俺はもう暴れはしねえ、放して呉れ〜」

良三もこの宿屋に同宿するやうになつてから、大部屋連中とも顔馴染みになつて居るので、行つて見ようかとも思つたが、惨虐な場面を見ることは、何だか怖しいことのやうに思はれたので、良三は躊躇して居ると

「松岡さん、居ますか、僕です、町田です」

息を切らして障子をあけて這入つて来たのは、昂奮しきつてゐる町田であつた。

「どうしたんだ。昂奮してしまつて」

良三はなるべく落付いた心持で、話をしやうと思つて、恚う云つた。

「僕は殺人罪を犯したのです。あいつは毒婦でした。凡ゆる男を肉で征服して居たのです。あいつのために、幾人の男が死んだか知りません。私は死んだ男達に代つて、あいつに復讐したのです」

町田は恚う云つて、良三の傍に、がっかりとして坐り込んだ。跡から来た連中は、何れも顔色を青くして震へて居た。

「松岡さん。僕の行爲を批判して下さい」

町田は恚う云つたが、良三はこの場合、騒動の渦巻きの中に捲き込まれて居る自分としては、落付いて、それを考へる餘裕はなかつたので、

「そんな批判なんかどうでも好いではありませんか。自分が確信してやつた行爲なら、人が何と云つたつてかまはないではありませんか——と云ふと、町田は

「さうです。僕はこの事を決行するまでには幾夜、悶えたか知りません。牢獄の生活も、

覚悟してやつた事です」と云つて、彼は微笑するのであつた。

其處へ、他の役者が来て

「町田君、あの女の傷は浅い。生命は別状がない。さあ、早く自首しろ」と云ふと、町田は立上つて

「何に、あの女は殺し得なかつたのか。ちえつ……」と血眼になつて、馳け出さうとしたので、良三は周章で

「おい、町田君、息の根をとめてしまはなくとも好いだらう。それだけの制裁を加へられたら、あの女も反省するに違ひない。それで充分ぢやないか」と叫ぶやうに云つたので町田は首肯して、またその場に坐つたが

「さうだ。僕は自首しなければならぬ」と再び立上つた時に、どや／＼と人が這入つて來たのは、誰かゞ警察署に急報したと見えて、五六人の巡査や刑事などが這入つて來たのだつた。

「これから自首しようと思つて居た處でした。お騒がせして申譯ありません」

町田は恚う云つて立上つた。その立派な態度に、其處に居た皆の者は愕いてしまった。

それから、皆は一部屋に集つて、町田のことや、切られた女優神山春代のことなどについて、隣方の四時頃まで、いろ／＼話をして居た。

良三は、お銀に呼び起されて、眼をさましたのは、もう十二時過ぎで、芝居の連中はもう、出かけて居た。

「随分、寢坊ね。どうしたの」

お銀は微笑しながら言つた。

「昨夜、この宿屋で大騒ぎがあつてね」と、町田といふ役者が、女優を斬つた話をして聞かせた。お銀は興味をもつて、その話を聞いて居たが、良三が話し終ると

「まあ、面白さうな事件ね。本當に、私だつて何時殺されるか知れやしないわ。恚うしてゐる處を、お杜己さんに見つかつたら、もう最後だわ。私の旦那だつて、ピストル位は、ぶつばなしてよ」と笑つた。

「それあ、大變だ」

『私は何とも思つて居ないことよ。この世の中には飽いてしまつたんだから。だけれど自殺する勇氣はなく、この先、三十年も四十年も生きて苦勞しなければならぬかと思ふと、一さうのこと、殺されてしまつた方がどんなに好いか判らないわ』

『俺はそんな氣持にはなれないね。石にかじりついてでも、永く生きのびたいね。昨夜のやうに殺されるといふことは、あんまり見つとも好くはないからな』

『女をだまかしてゐて、極樂浄土へ往生しようなんて蟲がよすぎるわ』

お銀は笑ひながら云つて、良三を睥むやうにした。

第九齣

良三との逢曳の數は累り、その交情が深くなり、その執着心はいよゝ強くなつて、永久に離れられないやうな感情に捉はれるやうになつて、お銀は自分の運命といふものに恐怖心を抱くやうになつた。

お銀はそんな悩みから、お杜已に對しても恐怖を感じるやうになつて、夜は悪夢に悩ま

される事が多かつた。血相變へたお杜已に何處までも追ひかけられる夢や乳のあたりを短刀でぐつと突刺された夢を見たりした。

それでも、良三に逢はないと、妙に淋しい感情が迫まつて來るので、不安を感じながらも良三と逢つて居た。良三から呼び出しがない時は、もう一刻も堪へられなくなつて、自分から出向いたりした。

その煩悶の月日が過ぎて行くうちに、お銀は妊娠の兆候を見るやうになつた。やがて生れ出づる子の父が、今自分の世話して居る米國人か、良三であるか、彼女には判らないことだつた。

生れ出づる子に依つて、自分の運命が審判されるのだと思ふと、お銀は恐しくてたまらなかつた。お銀は不安の極、墮胎といふ事まで考へたが、やがて生れ出づる子が、光輝ある運命を荷つて來て、罪の母ではあるけれど、自分を幸福にしてくれるやうにも思はれてそんな罪惡は、とても敢行することが出来なかつた。

妊娠の兆候があると告白してから、米國人は大さう喜んで、これまでより以上の愛情を

寄せて呉れるのが、お銀にとつて苦痛でならなかつた。

お銀は、自分の胎内にある子供が、何れの父に属したらよいか、自分で考へて見た。

「良三の子であつたら好い」——彼女はこんな事も考へて見た。が、これまで自分に種々と厚意を示した米國人のことを思へば、生れ出づる子は、米國人の子であつたら、物質的にはどれほど幸福な身になるかと思はれて、米國人の子であることが、生れ出づる子の幸福のためと、それを希ふ心が強かつた。

「生れて見なければ判らない事だわ。でも自分の子でなかつたといふ事が判つた時に、米國人はどんなに憤り、どんなに失望するだらう」と思ふとお銀は米國人の介捧を受けて分婉する事が恐しかつた。

そんな不安とお杜已に對する恐怖の爲め、お銀は近頃良三にもなるべく逢うまいとしたが、それは自分の本當の心に反逆することだつたので、彼女の苦惱は、日一日と強くなつて行くばかりであつた。

お銀はこの數日間、病氣だと言つて、良三にも逢はないで、一人で靜かに思索して居

たが、此處まで行詰つてしまうと、救ひ出される道もない様に思はれた。

お銀は、ふと思ひ出したのは、近衛隆子といふ女の事だつた。お銀は別に信仰に生きるといふ立場から、隆子の名を聞き、又知つて居るのではなかつたが、社會的に有名な女で、一部の人からは、生き佛様とまで、尊敬せられて居る事は、耳にして居たので、隆子に逢つて、相談して見たら、自分の行くべき道を、必ず教へて呉れるに違ひないと思つて、一日、隆子を訪れたのだつた。

けれど隆子は、お銀の前途の爲めに光明の道を開拓してやる緒を與へ得なかつた。お銀は、隆子の説く抽象的な議論よりも具體的な方法を教へて貰ひたかつたのだつた。

隆子が、初対面の時から、自分に對して、非常な好意を示して呉れたのが、お銀にはたまらなく嬉しかつた。それで、初対面の日から、五日目に再び隆子を訪れたので、二人の間には、より以上の親しさが生れて來て、その日に、隆子とお銀との間には

「次の月曜日に本牧に遊びに行く」といふことが約束せられたのだつた。

隆子は月曜日の來るのを待ち詫びて、忍び姿で、山の手電車に乗り、品川で京濱電車に

乗り換えて、櫻木町に下降すると、お銀は自動車で迎へに来て居た。

あまり外出したことの無い隆子には、港の町の情緒が堪えられない程の魅惑をもつてその胸に迫まつて来た。東京の街で見かけると同じ外國人の姿も、横濱に来て見ると、それが異國に在つて見るやうな氣がした。

そして、遠き國に在つて、歸國しようともしない夫陽一のこと、今更のやうに思ひ出されて涙ぐましくなつて来るのだつた。

本牧に来ると、其處には、東京で見るとは、まるで變つた感じの西洋館が、いくつも並んで居るのが、隆子の眼には、また異様に映るのであつた。

お銀の家は、思つたよりも立派な家であつた。なか／＼凝つた建築で、日本人の趣味の表現といふものは何處にも見られなかつた。すべてが外國人の生活に適したやうに建てられてあるのが、隆子には、たまらなく、なつかしさを感じせしむるのであつた。

室内の諸器具なども、日本製のものでないのを見て、この洋館の主人が、どれほど贅澤な生活をして居るかゞ想像せられた。

隆子は、長椅子によりかゝつて、腰を落ちつけた時に、ほつと軽い息をついた。自分の「桃色の部屋」とは全然趣きを異にして居るばかりでなく、又「桃色の部屋」ほど凝つてはないが、悠つたりとした、たまらない好い感じを受けた。何時までも離れ難いやうな氣がした。

米國から送つて来たといふ珍らしい乾果物や、これまで味つたことのない好い香のするコーヒーを飲んで、本牧まではる／＼と遊びに来た甲斐があるやうに思はれた。

お銀は隆子が非常に満足して居るのを見て嬉しかつた。そして、自分のこれまでの生活を、明らかに、何の偽る處なく、物語るのであつた。

「何といふ淺間しい人間生活でせう。こんな身の上話をお耳に入れて、定めし不愉快に思召されるでせうけれど、こんな地獄の生活をして居る者が、この世の中には、どんなに多いかと思ひます。私の知つて居る人の中には、澤山あります。それらの人々は、何れも、光明の世界を見ることが出来ないで、生涯を終るのです。私もさうした一生を終らねばな

らないかと思ふと、悲しくなつて來るのです」

その眼に涙を泛べて居るのを見て、隆子はしばらく黙つて居たが、慰めるやうに

「凡ての人間生活といふものが、地獄の生活なのです。じつと自分の生活を考へて見るときに、誰か、地獄の生活でないか、否定し得る者がありません。私達はこの世の中に居る生活をして居ても、何時も不安から脱れる事が出来ません。悲しみ、恐れと云つたやうな、自分の心に求めたいと欲しないものの壓迫を感じて居ます。その時に、私は何時も——観音——を念じて居ます。私は——南無觀世音菩薩——と唱ふれば、それで不思議に軽い心持になることが出来るのです」と言つた。

けれど、隆子はこんなことを言つても、観音の奇蹟的な靈現といふものに直面したことはなかつた。たゞ自分の信念から、観音を念ずれば、軽い安らかな氣持になれることは本當だつた。

汽車に乗つて居る時も、自動車に乗つて居る時も、電車に乗つて居る時も、隆子は思ひ出しては、靜かに観音經を唱へて居た。観音の願望にあるやうに、自分が観音を念じて居るから、

この汽車電車自動車の客には、決して危険が迫つて來ないと、彼女は信じて居た。

何處へ行つても、嘗つて危難に接したといふ事がないだけでも——運が好いと言へばそれだけであるが——観音を念ずる功德と思つた。それで、観音に対する信仰は充分であり功德もあるのだと思つて居た。

が、これだけの信念では、自分以外の人に観音愛を説いても、會得する人もなかつたので、隆子は、恚うした信念の境遇に住むといふことは、極めて、デリケートな問題であつて、決して、強制すべきものではないと思つて居た。例へば、高座に現はれて、説教をするにも、その効果が果して、どれだけあるかといふ疑問のために、高座に立つといふことは無意義な事であるやうに思はれて、氣が進まなかつた。

「人間の心持が、自發的にその境涯にまで這入つて行かなければ駄目である」と彼女は恚う思つて居た。

聖者の道を辿りたいといふ念願は、決して、人間的行爲から超越せよといふことであるとは思はなかつた。醜惡なる人間行爲の表面的露出は厭ふべきであるが、自分自身のみで

他に交響する處がなく、それに依つて法悦を得ることが出来るならば、その人の主觀に依る、その生活は否定すべきことではないと思つて居た。

それで、自分が今日、洋妾をして居るお銀の家を訪れたといふ心を、内省して見るならば、洋妾の生活に興味を抱いたこともあれば、異國に在つて放逸な生活をして居る夫陽一の生活を憶ふ嫉妬心もあつて、決して、清淨な心境ではなかつた。が、これには自分として辨明する理田はいくらもあるもので、自分が今日、お銀を訪れたという事には、社會に對して、やましいと思ふ處はなかつた。けれども信仰の女としての立場にある彼女には、自分の生活を考慮する淋しさ悲しさは確かにあつた。

こんなことを考へて居ながらも、隆子はお銀に對しては、聞くまい、聞かない方が好いと思つて居た異國人の性的生活といふものに就いて、質問したりした。

お銀は自分の生活を恥ぢるやうな態度をしたが、社會も自分も人格的に尊敬して居る女のことであるから、何も偽る處なく物語るので、隆子は初めて、廣い社會には、こんなどん底の生活をして居る女もあることを知つて愕いたが、そんな生活をして居る女も、決して

非難すべきでなく、低級な人間生活様式に生きて居る女達として、慙れんでやらなければならぬといふやうな慈悲心も起つて來た。又、一面から考へて見ると、お銀が辿つて來た人間生活と、自分のこれまでの生活とを同じ處に置いて公平に批判する時に、自分はお銀の生活を嘲笑する資格もなければ、誇りを感じることも出来ないのだつた。

「あなたは、私に身の上相談を持つて來ましたが、私は神でもなく佛でもないからあなたに、慙うしたがよいといふ事はとても出来ません。けれど、私の生活とあなたの生活とに大した相異がないといふ事は事實です。そんな生活をしながら、私が平然として居ることも、社會に對して恥ぢなければならぬことです。私は私自身があなたよりも偉大なる人間であると信ずる事は出来ません。でも、あなたが、自分よりも偉大なる女性と思ふならば、私の生活を模倣して行くことは、惡い事ではないと思ひます。聖女の生活は望み得られなくとも、私位の靈的生活を營むことは出来るでせう」

隆子はこの事を云つたが、自分としては確かに卑怯な態度であるやうに思はれた。けれど、人間世界には、これより以上のことは求め得られないことである。それ以上の精神

的安住は、神の國、佛の國でなければ、望み得られない事であつて、人間として一步も踏み出し得ない自分としては、これより以上の立派な言葉は見出し得なかつた。

隆子は、その日、黄昏頃にお銀の家を辭して、東京へ歸つた。歸る電車の中でも、異常な興奮に胸は一杯になつて居た。

第十齣

『桃色の部屋』で、隆子は今朝から、ある思索に耽つて居た。

自分の前にお銀といふ女が、突然出現してから、隆子はこれまで耳にしなかつたどん底の女の生活を聞き、不思議なことから知つた少年に對して、異常な性的感情を意識するやうになつて、聖女の道を辿らうと念願して居る彼女の心——不退轉な位置に据えられて居た？彼女の心には、鎮めることの出来ない波動が起つて來た。

聖女の道を辿らうとする念願と、性的生活に憧憬する焦慮とが、巴になつて、彼女の心を攪亂させるのであつた。

隆子は、さうした心の動搖に、一種の恐怖心を感じて、その煩悶から解脱しようとして、この數日は、一室に閉ぢ籠つたきりで、家の者にも、その姿を見せなかつた。

性的生活に對する憧憬——それは、これまで彼女が享樂して居たやうな觸感では、満足することの出來ないで、もつと深刻な觸感を欲求する悶えであつた。

隆子は、部屋の片隅に取付けてある、呼鈴がはげしく鳴つたので、吃愕して立上つた。緋縮緬の寐卷姿のまゝ懊惱して居た彼女は、あはてて着物をつけた。帯を結ぼうとしたがいくらかあせり氣味なので、なか／＼うまく結べないので、三度も結びなほしたりして、やうやく扉を開けて出て行つた。

茶の間に行くと、小間使が手をついて『お客様でございます』と言つた。

『どんなお方なの』

『この間、いらしたお坊ちゃんでございます』——と云つて、小間使は隆子の顔を、そつと盗見した。

その後、一ヶ月餘りも何の消息もなかつた少年が、突然訪問したといふので、隆子はは

つとした。妙な感情がその胸底に、こんがらかつて、すぐに返事する事が出来なかつたがふと、あの少年に逢つて見たいといふ好奇心が強く湧いて來たので、

「それちや、應接間にお通し」と言つて、自分は化粧室に行つて、女中のお秋に少し亂れた髪を、梳かせたりした。

しばらくして、隆子は應接室にその姿を現はした。少年は隆子の姿を見るとにつこりと笑つた。

「久し振りでしたわね。桃色の部屋にいらつしやう」

隆子は恚う云つて、少年を導いた。長い廊下を通つて行つたが、少年はこの前の時には夜であり、殊に狐にでもつゝまれたやうに夢中だつたから、あまり氣をつけなかつたので、隆子の家の様子に就いては、あまり知る處がなかつたが、今日訪ねて見て、堂々たる門構へ、和洋折衷の廣大な三階建の邸宅を見て、自分の家よりも、ずつと贅澤な生活である事を知つた。

殊に、初めて近づいた門札に「近衛」とあるのを見て吃愕したのだつた。

桃色の部屋に入ると、隆子は鏡を下した。少年は妙な興奮にかられて、佇立したまゝ今更のやうに隆子の姿を見つめて居たが、いきなり、隆子に取縮つた。

突然的な少年の狂的行爲に、隆子は愕いてその顔を見つめた。少年の眼は充血しきつて、自分の手を握りしめてゐるその掌は、火のやうに熱して居た。

「坊ちゃん。あなたは何をそんなに興奮して居るの。あなたの眼はダリアの花のやうに眞紅だわ。燃えて居るわ。あまりに燃えすぎると、自分自身の肉體も靈も燃えてしまつてよ」

——隆子は靜かに恚う云つて、少年を押しつけやうとした。

「あなたのもつてゐるものを、與へて下さい。あなたのすべてを」

少年は叫んだ。

「私のもつてるもの？私の愛するあなたに與へることは何でもないわ。理由に依つてはね」
隆子は、少年の抱擁から脱れようとおせつた。少年は力の限りに、それに反抗したが、隆子が力一杯に押しつけやうとして居ると知ると、がっかりして手を放した。

「理由、そんなことはどうだつて、いゝぢやありませんか」

「いゝえ。それはいけません。人間の生活といふものは曖昧であつてはいけないのです。悪をしても善をしても、當然に、遂行、要求の目的理由がなくてはいけないのです」

隆子の聲は峻厳であつた。少年は長椅子に倒れかゝるやうにして腰を下したが、柔かな毛皮の上に顔を埋めてしまつた。

「あなたが私に對する欲求——それはあなたの醜い慾情が欲するものでせう。あなたは此處一ヶ月ばかりの間に、たゞ、それだけしかの思索しか得られなかつたのですか」

恚う云つた隆子の言葉の底には、冷笑が籠つて居た。

少年は靜かに顔を上げて

「私はあれから今日まで、思索しました。その結果、私はあなたから、あなたのすべてのものを奪はうと決心して、すぐにお訪ねしたのです——力強い聲で言つた。

「私からすべてのものを奪うつて、奪つて見て、あなたに何か利益を齎らすものがありますして、私の持つて居るものが、あなたを向上せしむるために、用立ちますか」

「用立つのです。私に心の糧を與へるに違ひありません」

「私のもつてるものは、そんなに安つほいものでせうか」

「そんな質問を發せられるあなたは、あなたに對する私の要求を、そんなに安價なものと輕蔑してゐらつしやるのですか」

「いゝえ。決して輕蔑はしません。あなたが一生懸命になつて、お考へなすつたことなんですもの。けれど、私のすべてを、あなた一人の幸福のために、犠牲にするといふことは出来ないのです」

少年は哀願するやうに

「そんな強い事を仰言らないで下さい。私の寂しい心に、春の芽生えを……その動機を與へたものはあなただつたではありませんか」

「さうです。あなたがあまりに窮屈な物の考へ方をしてゐらしたから、私はそれを哀れまらずには居られなかつたのです。けれど、あなたの思索が、こんな方面に動いて來ようなどとは夢にも思ひませんでした。私は今日あなたの欲求を知つて、失望して居ます」

「私の考へて居る事がいけないのですか、間違つてゐることなのですか」

「さうです。私はあなたの心持が、清淨な方面に向つて行くに違ひないと信じて居りました。私が、あなたに對して執つた行爲は、あなた自身の獨創的な思索に依つて、もつと向上し、淨化したものとなつて行くに違ひないと思つて居たのです。けれど、さうした私の希望は、裏切られてしまひました。愛慾淨化といふことは、普通の人間の生活には求め得られない事なのです。求め得られないとすれば、精神の向上を望む者は、それより超越することになる事が、當然のことではないでせうか。其處まで考へ得られない人は、墮落して居るのです。地獄へ墮ちるべき人なのです」

隆子は少年に對して、こんな事を云ひながらも、幾度か、自分の心の中に秘む、いま一つの心が、自己を偽るな、虚偽の生活を恥ぢよ——と罵るのを意識した。けれども、彼女はそれに屈せず再び言葉をつとけた。

「あなたは弱い人間でした。普通の人間でした。私から恚う罵られるのが口惜しいと思ふならば、あなたはも一段進んで深く思索する氣概を起してこらんさい。あなたがそれほどまで、思索して見て、それでも精神的に開顯せられる處がないならば、私のすべてを

あなたに與へませう。私はあなたの要求を容れて自由になつてあげませう。私はあなたの精神生活の向上を促すために、犠牲となる事を決して厭ひません。あなたが、どうしても、それを欲求するならば……でも、あなたは其處まで私を犠牲にして後、必ず悔る時がある事を覺悟して居なければなりません。私は其處まで進んで行く力をもつて居ります。觀音の愛——その願望は、性慾生活に這入つて行つても、性慾を超越して、心の貧しき人を救済する處まで行くほどの無量無限の慈悲なのです。私はあなたに對しても、それだけの慈悲をもつて居ます。あなたに對してばかりでなく、すべてのものに對して、慈悲をもつて居ります」

少年は黙つて訊いて居たが、やがて

「私はもう歸ります。私はもつと考へて見なければなりません」と云つて、立上り、すこすこと歸つて行つた。その後ろ姿を見て、隆子は快心の笑を洩らした。

根來塗の机の前に座つて、隆子は一つの曼荼羅をしつと見つめて居た。

それは西藏のある曼荼羅で、かなり時代を経たものであつた。幼稚な筆致ではあつたけれど、宗教美術としては、嚴肅な氣持で接しなければならぬ程の價値あるものであつた。

西藏國に一人の暴君があつて、美しき女性と見れば、家來をして掠奪せしめ、愛慾の犠牲として居た。

無量無邊の慈悲の具持者たる觀世音菩薩はそれを悲しんで、暴君を教化しなければならぬとの願望を抱き、絶世の美女に化身して、妖艶な姿を暴君の前に現はした。

自分の國中を探して見ても、こんな美しい女性は得られまいと思つた暴君は、その色香に魅せられてしまつた。

そして、日夜枕席に侍らせて、夜のお伽をさせて居た。美しい一人の女性は、限りなき愛情をもつて、暴君に満足を與へて居たので、暴君は、他の女に眼を移す餘裕といふものがなかつた。それで、その國の女達は、不安から脱れて、安穩な生活をして行くことが出来

るやうになつた。

美しい女性と化身した觀音——その女性は、確かに、すべての女性の誇りであつた。その容貌が群を抜いて居るばかりでなく、女性として少しの缺點といふものがなかつた。

美しい女性の感化は、日一日と累つて行くに従つて、著しくなり、今まで指彈せられて居た暴君は、過去に於ける自分の行跡を懺悔し、知らず／＼の内に、その精神は淨化せられて行つた。

隆子はこの曼荼羅を見るときに、人間としてかなり、軽い氣持になる事が出来た。

觀音の愛は無量無邊である。救済のための慈悲は、すべての道德觀も超越し得るまでに熱烈である。姪姪となつて、その貞操を犠牲にし得るまでに深刻である——恚う思ふと、隆子はその極點まで這入つて行つても好い、自分は其處まで行かなければならぬのだと思つた。これまでもさうして心境に在つたが、それを敢行することはとても出来なかつた。清淨を何處までも保つて行きたいとの念願をもつて居た。

けれど、彼女の本然は、いつもそれを裏切つて居た。彼女は、慙うした精神的なチレンマにかゝつて苦しんで居たのだつた。

曼荼羅を手に入れてからといふものは、ずつと、その事を考へて居た。考へるほど、彼女には迷ひが強くなつて行くばかりであつた。

道德觀を超越するまでに行かなければならない——といふ理論は、彼女には充分に理解することは出来たが、敢行するといふ勇氣と決心とは、どうしても起つて來なかつた。従つて、彼女は自分の信仰を危んで居た。自分は、觀音の愛をもつて、すべてを救済し

得るだけの熱心さかないのだと思つて居た。

救済のために、道德觀念から超越する、そして、それは決して罪惡ではない——といふのであれば、自分の念願を達すること、進んで行くことは、決して難しいことではないので、自分も其處まで行つて見ようと思つと、軽い氣持になつた——が、いよ／＼となると、自分は死に行くまで、清淨でありたいと思ふのだつた。

が、自分が少年に對した行爲、洋妾の生活を見に出かけたことなどは、嚴肅な自己内省

から見ると、決して清淨なものであると、強く言ひ張ることは出来なかつた。

「自分はすでに汚れてゐるのである」

慙う思ふと淋しい氣持もしたが、自分の本當の心持が、確乎りしてゐたのだから、汚れてゐるのではない。自分は、さうした心持を體驗したのである。少年との關係も、肉體的關係にまで行つてゐないのである——自分は、あんな行爲をしながらも、いま一つの心が、じつと自分の靈を見つめて居た。さう思つと、彼女の心は明かになつて行くやうな氣がした。般若波羅蜜多の極致の凡ゆるものを空と見る哲學から言へば肉體的に汚される事も空であると思ふと、軽い氣持になつた。

「自分の胸底には、いま一つの心が潜在してゐる。一つの心が墮落を戀しがらうになると、それと反對に、自分の心持をじつと監視してゐるものがある——それに依つて凡俗の自分の清淨さは保たれて行つた」

曼荼羅は、隆子の眼の前に擴げられてあつた。性的決行の極點まで描かれてゐるのは、自分が宗教美術としての嚴肅さを何處までも保持しようとする心持を、暗い處へ導くやう

な恐怖を感じさせなくなつた。

第十二齣

「生の歡喜に私の心は物狂はしくなるほどでした。私の全身の慾望は、あなたの暖かき抱擁の夢に憧れて居ります。私も嘗つてあなたに要求せられたやうに、あのお言葉に従うであります。私は今日からは、血糊のやうな生臭い異臭に満ちた人生の道を辿らうと決心しました。私の精神的欲求は、清淨なものへ——との道程から遠のいて行きつゝあるのです。それだけでは満足が出来ないやうに思はれて仕様がなないので。私は清淨の中の清淨を見るよりも、不淨の中に眞の清淨な光りを見出さうと思ひました。それには何物をも體驗しなければなりません。すべてのものを體驗しなければ、その善惡の鑑別は私には判らないのです。私はこれまで、あまりにすべてのものに恐怖を抱いてゐました。それは今になつて考へると、確かに無意義な恐怖でした。其處を自覺した私には、新しく勇氣が湧いて來たのです。私は失望しかけてゐた自分自身に、ある希望を抱くやうになりました。そ

の喜びのために、私の氣は狂つて行きさうなのです」

二日の後、訪れた少年は、その顔にこれまで見ることの出来なかつた、はれやかさを浮べて、隆子にせまつて來た。その眼は燃えて居た。何物をも溶解せずには居られないほどの熱に燃えてゐるので、隆子は思はず、後退りをした。

少年はぢり／＼と迫つて來た。まるで惡鬼が、凄い笑を洩しながら、心の奥底に、何物かをたくらんでゐるやうな、淺間しさがその表情に現はれて居た。

部屋の中は、しんと水を打つたやうな靜けさになつた。少年の荒い息づかひが、呪はしく、隆子の胸に響いた。

隆子はじり／＼と、まだあとすざりをするかと思ふと、思索の部屋にすつと這入つて、扉を堅くしめてしまつた。

「どうして逃げるのです。あんまり卑怯ではありませんか、卑怯ではありませんか」少年は扉にすがつて恚う叫んだ。

「私はあなたの恐しい姿を見るに堪えられなくなつたのです。歸つて下さい」

と隆子は夢中になつて叫んだ。

「あなたは卑怯です。私の思索を破壊して、新しい世界の光明を見せようとしたのは、あなたではありませんか。私は浅薄な思索から今日の行爲を執つたではありません。あなたの傀儡となつて、ある一時を過ぎたならば私は、また一つの行くべき道を開拓し得るに違ひありません。私は行詰つてゐます。その行詰つた道を開拓するには、この問題にぶつつかねばならないのです。解決しなければならぬのです」

「いゝえ。あなたはもつと考へねばなりません。あなたは内省してごらん下さい。私の言つた言葉が、あなたに今日のやうな行動をとらせる原因となつたといふことは、嘘です」

「幾日か思索して見ました。私はどうしても體驗しなければなりません」

「そんな理論は立ちません。あなたは、もつと考へてごらん下さい。體驗するといふことは、極めて平凡人の考へる事です。體驗しなくとも、體驗の心持を理解することは出来る筈です。あなたは其處まで考へねばなりません」

「私はそんな素い人間ではないのです。すべてに、ぶつつかつて見て、はじめて、開顯さ

せられるのです。素い人間は、あなたの仰言るやうなことが出来るでせうが、私には出来ないのです」

「あなたの心の底に醜惡な慾望に餓えた悪魔が跳梁して居ります。あなたは先づ、その悪魔を追拂はなければなりません」

隆子の強い反抗に、少年は絶望的になつて

「あなたこそ私の純な心持を弄んだ、美しき悪魔ではありませんか。あなたが私に怱うしたことを意識させなければ、私はあなたから、こんなに恥かしめられなくとも、好かつたのです。私はどうしても、このまゝでは退去することは出来ません」

「あなたは自分を純なるもの、清淨なるものであつたといふ事は潜越です。あなたの心にさうした間隙があつたからこそ、私の言葉に容易く動搖したのです。私を責める前に、あなたは自分の心を折伏しなければならぬのです」

隆子は怱う叫んだ。少年は力なく、床の上に倒れた。隆子の稱へる観音經——

妙音觀世音

梵音海潮音

勝彼世間音

是故須常念
 於苦惱死厄
 慈眼視衆生
 念々勿生疑
 能爲作依怙
 福聚海無量
 觀世音淨聖
 具一切功德
 是故應頂禮

かすかに震へを帯びた聲が、扉の隙間から洩れて来た。

「あけて下さい。私に死ねと仰言ると同じです。あけて下さい」

少年はうはことのやうに云つた。けれども隆子は扉を開けなかつた。

「少年の要求に服従する——ことには自分の本能は決して反抗はしない。けれど、自分のこの少年の爲に犠牲になつて、果してこの少年は救済せられるであらうか。少年の心的傾向が、こんな方面に向つて動いて来なかつたならば、自分から、この少年に接近して行かうと努力したに違ひない。而し、それは自分には危険な事であつた。少年が恚うした方面にその心を動かすやうになつたので、自分は少年を忌避する心持になつた。少年が絶望して自殺を決行し得る程なら、もつと深刻な思索に耽ることが出来たであらう。この少年は今自分の慾望を達することが出来ないでも、決して自殺を敢行する事は出来ない」

彼女は恚う思ふと、何處までも、少年の要求を撃退しようと思つた。

「自分が今、此處で少年の要求を容れるといふ事は、確かに安價な犠牲といふことになる。觀世音菩薩は無量無邊の慈悲に依つて、或は救済のためには、淫女のやうな生活に入ることも決して否定しないが、それは絶対の場合である事は云ふ迄もない。安價な犠牲になるやうなことはなさらないのである。自分が今、此處で少年の要求に應ずることは少年を救済するための慈悲ではなく、自己の本能に對する敗北なのである」

恚う思ふと、隆子は明るい心持になつた。自分が、觀音の願望を、自己の願望としてゐるといふ誇りを、少しも瑕つけられないと思ふと、自分の精神生活の強固なのに、彼女は感激せずには居られなかつた。

隆子は扉によつて、靜かに觀音經を唱へてゐた。少年のすゝり泣きが、いつまでも聞えてゐた。

半時間、一時間が過ぎた。隆子は夢中になつて、觀音經を唱へて居た——ふと、少年のすゝり泣きが聞えなくなつたので、扉を開けて、そつと覗くと、少年はそのまゝ、眠りに

入つて居るのであつた。

淡かな寐息をしながら、眠つて居るその顔を見ると、この前に見たその寐顔とは思へないほどに、憔悴して居た。幾夜か少年が苦惱したかが、忍ばれていぢらしいほどだつた。けれども、苦悶の中にも、少年の顔には、まだ純真さがあつた。

その純真さに、隆子はたまらない魅惑を感じて、微笑を禁ずることが出来なかつた。少年の今日の言葉は、本當に眞剣な叫びであるに違ひない。さう思ふと、隆子は自分を忘れて、少年の頬に口づけをした。

深い眠りに陥つて居る少年は、その口づけも知らずに眠りつゞけて居た。

隆子は少年に枕をあてがつたが、少年はそれでも眼をさまたさなかつた。隆子はじつと枕許に座つたまゝ、飽くほど、その顔を見つめてゐた——さうした時間が一時間もつゞいて少年に對する嫌惡が、次第／＼にうすれて行つた。

少年が深い眠りから眼をさました時には、もう、電燈がぱつと點いて居た。隆子はそれまで、じつと少年の枕許に座つてゐたが、少年が眼をさまして、大きな眼で、くるり／＼

と、部屋の中を見廻はして、その視線がぱつたり合つた時に、二人は微笑を交した。

「私にあのまゝ眠つちやつたんですね。あゝもう電燈がついて居る」

恚う云ひながら、少年は起き上つて、

「私歸ります」と云つて、身づくろひをして居た。隆子は少年に別れを惜しむ氣持が、不思議に起つて來た。

「もう歸るの、もつと遊んでいらつしやいな」

隆子は少年のうしろに廻つて、羽織の衿をなほしてやつた。

少年は急に涙ぐんで、軽く肯いた。

第十三勳

お銀の分娩期が近づいて來た。心に暗い影を抱いて居る彼女は、米國人の前で、分娩する事が怖しかつたので、人手が足りない事を口實として、東京駿河臺のある産科病院に入院する事になつた。

松岡は、お銀が東京の病院に入院してからは、思つたやうに、その顔を見ることが出来ないので、淋しく、毎日のやうに、芝居や活動に行つたり、なじみになつたカフェーなどに行つて、徒然を慰めてゐるが、ある時は、お銀がたまたまなくなつてかしくなつて、横濱から、ちよいと遊びに来た。それも、お杜己が自分の行方を探してゐるに違ひないと思ふと、東京に足を踏み入れることも、何だか怖しかつたので、お銀に逢ふことも、なるべく控えて居た。

米國人も、お銀が入院してからは、一週間に一度、土曜日の午後に見舞に来て、夜八時頃になつて歸つて行つた。

小林みち子といふ看護婦を付添ひとして雇つて置いたが、その看護婦は、文學に興味を抱いてゐるので、初産のために身體を大切に寝ころんでばかり居るお銀に、いろいろと自分が讀んだ小説の話をしたり、また、雑誌などを讀んで聞かせたりするので、お銀は、いつも徒然を忘れて、楽しい病院生活をする事が出来た。

お銀は、近衛隆子にも、自分が入院してゐる事を知らせる手紙を出した。そして、その

手紙には、淋しい自分、涙ぐましい自分——のみじめな姿を、絶望的になつてゐる姿を、こま／＼と書いてやつた。

隆子からは、すぐに返事が来た。

——すべては時が解決してくれる。それまではなるべく心を平和にして、性格破産者とならぬやうに、精神淨化に精進したが好い。——

といふやうな事が書いてあつた。

やがて生れ出づる子——その子が米國人の子であることを、お銀は祈つて居た。自分がこんな大きな罪惡を犯して居ながら、こんな勝手な願をするのは、神佛の容れる處ではない。けれど、生れ出づる子が、米國人の子であれば、自分の秘密は明るみへ晒されなくともすむ。暗の中に埋もれて、自分は良心の苛責に苦しめられながらも、纏縫することは出来る。さうなれば、すべては、圓滿に解決する、すべての幸福に育ぐまれた生活をする事が出来るやうになる——お銀は、寐てもさめても、こんな事を考へて居た。

が、分曉した子が、松岡の子であるといふことが知れた時にお銀は豫想してゐたことなが

ら、吃愕りした。

松岡の子である——といふ事實が、自分の前に展開せられると、もう、どんなに惱んでも駄目だと、死刑囚が最後の宣告を受けたと同じやうに、すべてを断念してしまつた。

「自分が米國人と別れるのは、反つて自分のためによい事である。浅間しい生活と絶縁することが出来る」と云つたやうな、軽い心持にもなる事が出来た。

分曉したのは、朝の十時頃だつた。看護婦が氣をきかして、横濱の方へ電報を打つたので、米國人は夕方病院に馳けつけたが、お銀の傍に眠てゐる子供の顔を、じつと見つめてゐた米國人の顔は、見る／＼うちに青ざめて行つた。

お銀は米國人が來た事を知つてゐるが、生れ出でた子を見ると、もう米國人の顔を正視する事は出来なかつた。

お銀は、もう觀念して、温順しくその審判を待つて居た——米國人は、じつと瞑目して、しばらく考へて居たが

「安産してお目出度う。産後が大切だから、十分に養生したが好い。私はあなたが早く退

院するのを待つて居る」と言つて、すぐに歸つて行つた。

たゞこれだけ言つて絶望的な懊惱を見せて、憤りもせず、歸つて行く後ろ姿をじつと見送つて、お銀は思はず涙ぐんだ。

「すべては、もう審判せられたのだ、私とあの人の間には、深い溝が出来たのだ」

お銀は毛布を頭から冠つて、泣いてゐた。審判があまりに神々しいのに、お銀は感激してゐたのだつた。そして、自分の罪がどんなに恐しく、そして大きいかが、痛切に思ひ出されるのだつた。

それから三日目に、横濱から女中が來た。

「これで病院の支拂をすましたら、横濱にかへつて來い」といふ言葉であつた。

五百圓の紙幣を手にして、お銀はあまりの嬉しさに、聲を立てゝ泣いた。

「罪のある自分に制裁も加へず、私に歸つて來いといふは何といふのは、何といふ立派な態度であらう。尊敬すべき人格者であらう。極みなき愛の表現であらう」

恠う思ふと、今まで、横濱に歸らずに、何處かに姿をかくしてしまはうと考へてゐたお

銀は、すべての罪を悔悟して、その許しを得なければならぬ。そして、松岡とは、永遠に別れて、犠牲的に何處までも奉仕して行かうと決心した。

お銀はその日から、まるで生れ代つた人間のやうに明るい氣持になつた。彼女は今日までの、頭に石を冠せられたやうな壓迫の生活から脱れて、新しき人生へのスタートを切つたやうな歡喜を感じた。

従つて、今後の自分の身體の處置といふことについては、その頭腦は、極めて鋭敏に動いて行つた。

お銀は、その夜、松岡に是非逢つて相談したい事があるから、明後日、病院に訪問するやうにとの手紙を出した。そして松岡に永遠の別離を告げるに、立派な言葉を考へた。

松岡はお銀から指定せられた日に、病院にやつて來た。お銀が出産してから、初めて訪問したのであつた。

「安産したんですつて、お目出度う」

松岡はお銀に恚う云つて、赤ん坊を覗いて見た。

「その子の父親は、誰だと思ひます」と云つた言葉は、日頃のお銀の口から出た言葉とは思はれない位に、嚴然としてゐた。

松岡は恚う云はれて、悸つとして、お銀の顔と、子供の顔とを見つめた。

「その子の顔をこらんない。その子の黒い髪の毛をこらんない。その子の黒すんだ瞳をこらんない。」

お銀は床の上に、もう座つて居た。松岡がかすかに戦きながら黙つて居るのを見て、

「その子の父親は、あなたであるといふ事は、もう否定することは出来ないでせう。あなたはこの子供の父親としてすべての責任と義務とを負はなければならなくなつたのです」と云つた。

松岡はお銀の顔を見てゐるが

「さうだ。俺の子に違ひない」と力強く云つて、赤ん坊を抱き上げた。

「私は今、自分があまりに罪が深かつたことを後悔してゐます。米國人は私に人間として立派な態度を見せてくれました。私はこの子の顔を見て、何とも言はず、一昨日、五百

圓の金を送つて早く横濱に歸るやうにと云つて來たその心に、私は感激せずには居られないのです。私はをあなたを愛してゐました。けれど、私の罪を宥して呉れた異邦人の無限の愛に酬るために私のすべてを犠牲にしなければならぬとの決心をしたのです。あなたも、人間として、この問題の解決のために、異邦人に劣らぬやうな、立派な態度を見せて下さい」

お銀はこれだけの言葉を一昨日から考へてゐたのだつた。けれど、松岡の顔を見ると、その決心も鈍らうとするのだつたが、理智的な彼女は、もう、自己の愛着に捉はれて、松岡に未練を持つてゐるやうな弱々しい態度では居れなかつた。

自分に對して、極みなき忍耐と好意とを見せて呉れた異邦人の人格に感激してゐる彼女は、すべての小さなこだはりから離れて、もつと／＼大きな愛に生きて行かなければならなかつた。それには、松岡に對する未練も子に對する愛着も小さいものであつた。彼女には、異邦人の好意に對して酬るためには、松岡を殺害し、愛兒を絞殺するだけの決心もあつた。

「俺も男だ。立派な態度をとる。この子は俺が貰つて行く、そして立派な人間に仕立て見せる。お前は自分の信念のために、何處までも進んで行つたが好い」

「ほんとうにさうして下さい。私は、あの人に對して、私の心が満足するまでのことをしてやらなければならぬのです」

「俺はもう何にも言はぬ。俺はこの子を引取つて、立派に育てて行く。俺はお前と同じやうな感激の中に在る。その感激は言葉に現はすことが出来ないほど深刻だ。俺はお前を、こんなに立派なことを考へるやうな女と異つてゐなかつた。俺は今日までお前に對して考へてゐたことを後悔せずには居られないのだ」

「よく云つて下さいました。あなたのその立派な態度は、あの異邦人に勝るとも決して劣りはしません」

お銀は怒う云つて、手をさしのべると、松岡は子供を抱いたまゝ、ころげるやうにしてお銀の手に取縮つて、はら／＼と涙をこぼした。

沈黙が長い間続いた。

「俺は明日来る。きつと来る」

松岡は力強く云つて、そのまゝ、病室を出て行つた。

お銀は松岡の態度が、思つたよりも立派だったので愕いた。そして、本當に自分の心持を了解してくれた心が嬉しくてならなかつた。

習朝十時頃になつて、松岡は三五六の女を連れて來た。

「この子供なのです。立派に養育して下さい」と、その女に云つた。

「まあ、可愛いお子さんですこと」

その女は、お銀に挨拶することを忘れて、子供を抱き上げた。

「知合の人に相談して、このお方にお依頼することにした。俺はこのお方を信頼して、この子の養育を依頼する事にした」

松岡はお銀に怄う云つた時に、その方は初めて、お銀に挨拶をしなかつたことを意識して、ほつと顔を赤めて挨拶した。

「私はもう感謝の言葉を見出し得ません。どうぞ、この子を立派に育てて下さい」

お銀ははら／＼と涙をこぼした。

第十四齣

觀は諦觀、世音は願ふ者の聲、菩薩は自利利他成就の佛果を願ふ大心あるもの、私は佛

陀の誓言に無條件で安心することが出来る。

私は觀音の妙智力を飽くまで信ずる。私は常に觀音を念じて居るから、如何なる事に直

面しても、愕き周章することは無い。

私は觀音愛の具持者である。私に接したすべてのものは如何に焦つても私の生活を否定する材料を私から見出し得ない。

私は現世に垂跡したる悲體の觀音である。慈悲あればこそ、衆生を救済するために惡魔の姿ともなり、淫女ともなる事がある。

私は勝彼世間音の開顯者である。私の口から出づる言葉は強い。その力よりも強い信念を與ふるものは、私より他に一人もない。

私は愛他利他の慈悲心を本とする方便によつて、忍辱土に遊ぶ事がある。一切の衆生を慙む故に自分を供養する心を去るのである。

私は神通力を具足する。自分の意のままにして、他の制肘を得ることなく、靈妙不測、洞達無碍の力は、私の身體に溢れて居る。

私の音聲に觸るゝ者は、阿耨多羅三藐三菩提心を發し得るの境涯に至るであらう。何と

なれば觀音の化身であるからである。

隆子は、小さい手帖に向つて、朝から思案に耽りながら、何か書きつけてゐたが、夕方になつて、その手帖には、こんな事が書き止められた。

隆子は幾度も繰り返し読んで居たが、微笑せず居られなかつた。

「こんな事を書いたつて、決して潜越ではない。私には、これを書き得るだけの自信があつたから書いたのである。私の生活を見るものは、必ず無條件で共鳴してくれるであらう。私の内面に燃えて居る。いや時には狂亂に近いかいまでの人間的な愛慾の衝動も、私には自制し得るだけの力があつた。私は自制して來た筈である」

恚う思ふと、自分の生活を自分で否定するやうな心持は起つて來なかつた。

「私の生活は、聖者の生活に近い。私の念願は、聖女への憧憬である」
彼女は恚う叫んで、自分の心に少しも恥づる處がなかつた。

その夜、隆子は、あと三日の後に迫つて居る、佛教婦人會の席上で、説教しなければな

ないので勝鬘夫人の信仰に就いて説教しようと『大寶積經勝鬘夫人會』や『勝鬘獅子吼一乘大方便廣經』などを取り出して、その材料を調べて居た。

隆子は、近頃でない緊張した心持で、説教をしたい慾望にかられて居た。畢世の雄辯を振つて、聽衆に感銘せしめずには置かないといふ熱烈さで、壇上に立たうと思つた。

第十五勦

僑薩羅國は印度に於ける大國でありましたが、國王波斯匿王は、下賤より身を起したといふので、階級觀念の強い釋種の人々から歓迎せられて居りました。

釋種の人々と對等の交りをする事が出来ず、何かの機會がある毎に、それは心の僻見からでもあつたか知れませんが、侮辱せられて居るやうに思はれて腹立たしいことばかりでありました。

「自分は印度に於ける鷲目昇天の勢力者である。自分の自分の向ふ處に敵はない。武辨者として畏敬せられては居るが、種族差別觀念の強い風習は、どうする事も出来ない。何か

の方法はないものだらうか」

波斯匿王は何時もこんな煩悶のために憂鬱な顔ばかりして居りました。家來の一人は王の煩悶を知つてゐましたので、ある日。

「釋種と對等の交りをするには、結婚政策より他によい道はあるまいと思ひます。迦毘羅城へ結婚のことを、お申込みなすつては如何でございます。弱國のことでございますから大王の威力に惧れて、話は容易く纏るでございませう」と申上げました。

波斯匿王はそれを聞いて、一縷の光明を見出した人のやうな喜びを感じて、僑薩羅國の威力を楯にして、言葉にある意味を含ませて、迦毘羅城へ使者を遣はし、婚姻を申込みました。

この婚姻の要求は、迦毘羅城にとつては、實に晴天の霹靂でありました。その要求に應じたければ、僑薩羅國はすぐに兵を進めるに違ひない。戦端を開くとなつては、摩揭陀國に勝算があるとは、どうしても思へないので、迦毘羅城では、王を始め重臣達が集つて、評議をしましたけれども、自分の娘を波斯匿王に嫁がせようと、自發的に申出づる者はあ